

大板井遺跡 32

—福岡県小郡市大板井所在遺跡の調査報告—

小郡市文化財調査報告書第 359 集

2024

小郡市教育委員会

序 文

小郡市では、国指定史跡「小郡官衙遺跡」や「上岩田遺跡」、「花立山古墳」のような重要な史跡が多く発見されており、遺跡の宝庫として全国に知られてきました。

これに加えて、人びととの結びつきをより大事にするため、「小郡官衙遺跡」や「旧松崎宿旅籠油屋」など遺構から当時のものを可能な限り復元したり、近隣住民がより文化財に親しみやすいようにしてきました。こうした「遺跡」と、「人とのつながり」をかけあわせることで、さらに多くの人びとに「小郡市の文化財」知ってもらうことで、現代において多様な人びとがさまざまな発見ができます。

今回ここに報告いたします大板井遺跡は、昭和50年代から現在まで継続的に発掘調査が行われてきた遺跡です。これまでの調査では、縄文時代から近世までさまざまな資料が発見されています。このような情報の蓄積により、郷土の歴史をより深く、厚みをもったものとして伝えていかなければなりません。それを次世代に伝える一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査において地元大板井地区のみなさまには多大なご協力をいただきましたこと、記して感謝申し上げます。

令和6年3月31日
小郡市教育委員会
教育長 秋 永 晃 生

例 言

1. 本書は小郡市大板井に所在する埋蔵文化財包蔵地・大板井遺跡地内で計画された、宅地造成に伴う道路新設工事に先立って実施した発掘調査の報告書である。
2. 本報告書に掲載した遺構図面は調査担当者で一木賢人、高橋渉、柏原孝俊が作成した。
3. 発掘現場での個別遺構写真は調査担当者が撮影し、遺跡全景写真の撮影については有限会社空中写真企画に委託した。
4. 巻末写真図版の遺物写真の撮影は有限会社システム・レコに委託した。
5. 出土遺物の洗浄・復元には佐々木智子・佐藤優子・久佐木美樹の協力を得た。遺構図面の製図は宮崎美穂子が、遺物実測は調査担当者と林知恵が、遺物実測図の製図は久住愛子が行った。
6. 本調査に関わる出土遺物・写真・カラスライド等は小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管している。広く活用されることを希望する。
7. 本報告書での甕棺時期や型式の同定には橋口達也氏の『甕棺と弥生時代年代論』(2005) にならった。
8. 本報告書での瓦の型式の同定には小郡市教育委員会『井上廃寺1』(1998) の型式にならった。
9. 本報告書の執筆・編集は三津山が担当した。

凡 例

1. 本書で用いた北は座標北を基準とし、図上の座標は国土座標第Ⅱ系(世界測地系)に拠っている。
2. 本書で用いた標高は東京湾平均海水面(T.P.)を基準としている。
3. 本書で用いている略号は以下のとおりである。

竪穴住居址：SC 土坑：SK 溝：SD 土壇墓：SR 甕棺墓：ST 井戸：SE ピット：SP

本文目次

第1章 調査の経緯と経過	1
調査の経緯	
調査の組織	
調査の経過	
第2章 位置と環境	2
地理的環境	
歴史的環境	
第3章 調査の内容	5
第4章 調査成果のまとめ	24

挿図目次

第1図 大板井遺跡 調査区位置図 (S=1/5,000) 及び周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)	3	第11図 1号竪穴住居址 平面図・断面図 (S=1/40)	13
第2図 大板井遺跡 32 遺構配置図 (S=1/300)	4	第12図 1号土坑 平面図・断面図 (S=1/25)	14
第3図 5号土坑 平面図・断面図 (S=1/40)	5	第13図 1号土坑出土土器実測図 (S=1/4)	15
第4図 5号土坑出土土器実測図 (S=1/4)	5	第14図 1号土坑出土瓦実測図① (1:S=1/4、2:S=1/5)	16
第5図 1号甕棺実測図 (S=1/5)、2号・3号甕棺実測図 (S=1/8)	7	第15図 1号土坑出土瓦実測図② (S=1/4)	17
第6図 1、2、3号甕棺墓 平面図・断面図 (S=1/20)	8	第16図 1号井戸 平面図・断面図 (S=1/25)	19
第7図 1号・2号土壙墓 平面図・断面図 (S=1/20)	9	第17図 1号井戸出土土器実測図 (S=1/4)	20
第8図 1号・2号溝 土層断面図 (S=1/40)	10	第18図 1号井戸出土木柁④、⑤実測図 (S=1/8)	21
第9図 1号・2号溝出土土器実測図 (S=1/4)	12	第19図 1号井戸出土木柁⑥、⑦実測図 (S=1/8)	22
第10図 1号竪穴住居址出土土器実測図 (S=1/4)	12	第20図 1号井戸出土木柁⑧実測図 (S=1/8)	23
		第21図 9号・10号土坑 平面図・断面図 (S=1/40)	23
		第22図 2号土坑 平面図・断面図 (S=1/40)	24

図版目次

図版1 ①調査区全景 (直上から、写真上方が北) ②墓群全景 (南から)	④1号土坑 土層断面 (東から) ⑤1号土坑 完掘状況 (西から)
図版2 ①調査区北部全景 (南から) ②5号土坑 完掘状況 (南から) ③1号甕棺墓 出土状況 (東から) ④2号甕棺墓 出土状況 (南から) ⑤3号甕棺墓 完掘状況 (東から) ⑥1号土壙墓 完掘状況 (南から) ⑦2号土壙墓 完掘状況 (南から)	⑥2号土坑 土層断面 (東から) ⑦10号土坑 完掘状況 (西から) ⑧1号井戸 木柁出土状況 (東から)
図版3 ①1号竪穴住居址 土層断面 (西から) ②1号竪穴住居址 貼床検出状況 (西から) ③1号土坑 遺物出土状況 (南から)	図版4 出土遺物 (1) 図版5 出土遺物 (2) 図版6 出土遺物 (3)

第1章 調査の経緯と経過

調査の経緯

小郡市大板井に所在する大板井遺跡は、昭和50年代から令和4年度までに31次の調査が実施され、縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが確認されている。特筆すべき時期は弥生時代中期頃の集落跡で、多くの竪穴住居や祭祀土坑、甕棺墓群が確認されており、また古代の小郡官衙遺跡関連の集落も確認され、当時の中核的な集落であった遺跡である。

本遺跡の調査は、宅地造成に先立って「埋蔵文化財の有無に関する照会」（事前審査番号21059）が提出されたことに始まる。これを受けて試掘調査を実施した結果、埋蔵文化財の存在を確認したため、造成工事に伴う新設道路部分については発掘調査による記録保存が必要な旨を回答した。その後、施工業者と小郡市教育委員会で協議し、令和4年度事業として発掘調査を実施し、翌年度に調査報告書を刊行することで同意を得た。

調査の組織

調査に関わった組織と担当者は下記のとおりである。

＜小郡市教育委員会＞

教育長 秋永晃生

教育部長 藤吉 宏（～R5.3.31） 熊丸直樹（R5.4.1～）

文化財課長 杉本岳史

係長 山崎頼人

技師 三津山靖也（会計年度任用職員）

＜調査参加者＞ 井樋博志 草場誠子 串尾弥代子 瀬戸口善行 田崎正夫 田中雅子
平林昌代 吉田 浩（以上小郡市在住、五十音順）

調査の経過

発掘調査は令和4年7月25日から10月26日にかけて実施した。調査区は現況地表から65cmの深さまで近年の耕作土を重機で掘り下げ、その後人力で遺構の検出・掘削を行った。

以下に調査日誌より調査の経過の概略を記す。

令和4年7月25日 重機による調査区表土の掘削開始。

8月4日 機材搬入。

8月5日 人力による遺構検出・掘削開始。墓群、住居、溝、土坑、井戸、ピット群を検出。
随時遺構の掘削、記録図化、写真撮影を実施。遺構の主体は弥生時代と古代。

10月24日 全ての遺構の掘削、記録図化を完了。

10月25日 ドローンを使用した全景写真の撮影。その後、井戸の木枠の取り上げ。

10月26日 工事作業のため埋戻し、引き渡し。発掘調査終了。

以後、埋蔵文化財調査センターにおいて、図面・出土遺物の整理作業を実施。

第2章 位置と環境

地理的環境

小郡市は福岡県の中央部に位置し、博多湾から南東に約25km、有明海から北東に約30kmの内陸部にある。市域は東西約6km、南北約12kmの総面積約45.5km²を有する南北に長い行政区を持つ。また、小郡市の中央には宝満山を水源とする宝満川が東西を分断する形で南北に流れている。その北西部の脊振山から派生する丘陵部（通称：三国丘陵）と、北東部の花立山（標高130.8m）から伸びる丘陵が南側へ緩やかに下る平坦な台地に移行し筑後平野へと連なる。大板井遺跡はこの三国丘陵から緩やかにつながる低台地上に位置し、本遺跡は幅の広い舌状の台地に展開している。

歴史的環境

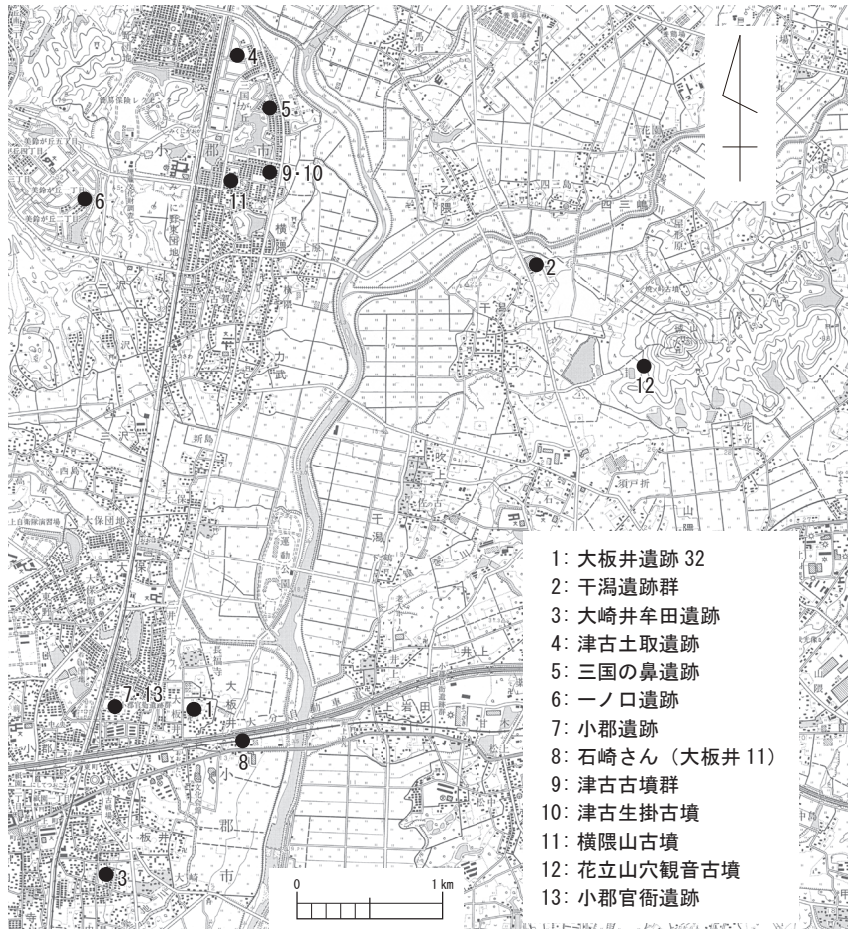
大板井遺跡は1923年（大正12年）、当時の九州帝国大学（現在の九州大学）の中山平次郎博士の論文『筑後國三井郡小郡村大字大板井の巨石』（通称：石崎さん）で報告された著名な遺跡である。1935年（昭和10年）に甘木鉄道の鉄道軌道敷きに伴う土取りにより銅戈7口が発見され、その後の1980年（昭和55年）から本格的な発掘調査が始まり、今回までに31回の調査が行われた。大板井遺跡は弥生時代中期の拠点集落として評価されており、弥生中期から後期にかけての成果が着々と積み重ねられている。また、大板井遺跡の西側には小郡官衙遺跡があることから、古代の集落に関する成果も併せて蓄積されつつある。以下では、本遺跡の周辺地域に分布する遺跡を中心に歴史的環境の概要を示す。

小郡市内において人々の活動が最初に確認されたのは、旧石器時代である。しかし、この時代の遺跡は非常に少なく、三沢丘陵、夜須高原南麓、花立山周辺ではナイフ形石器や大板井遺跡6区で当該時期の石器が確認されているだけで、続く縄文時代においても遺跡・遺構は非常に少ない。干潟遺跡群(2)の落とし穴状遺構や大崎井牟田遺跡(3)の集積遺構などが確認できた程度である。

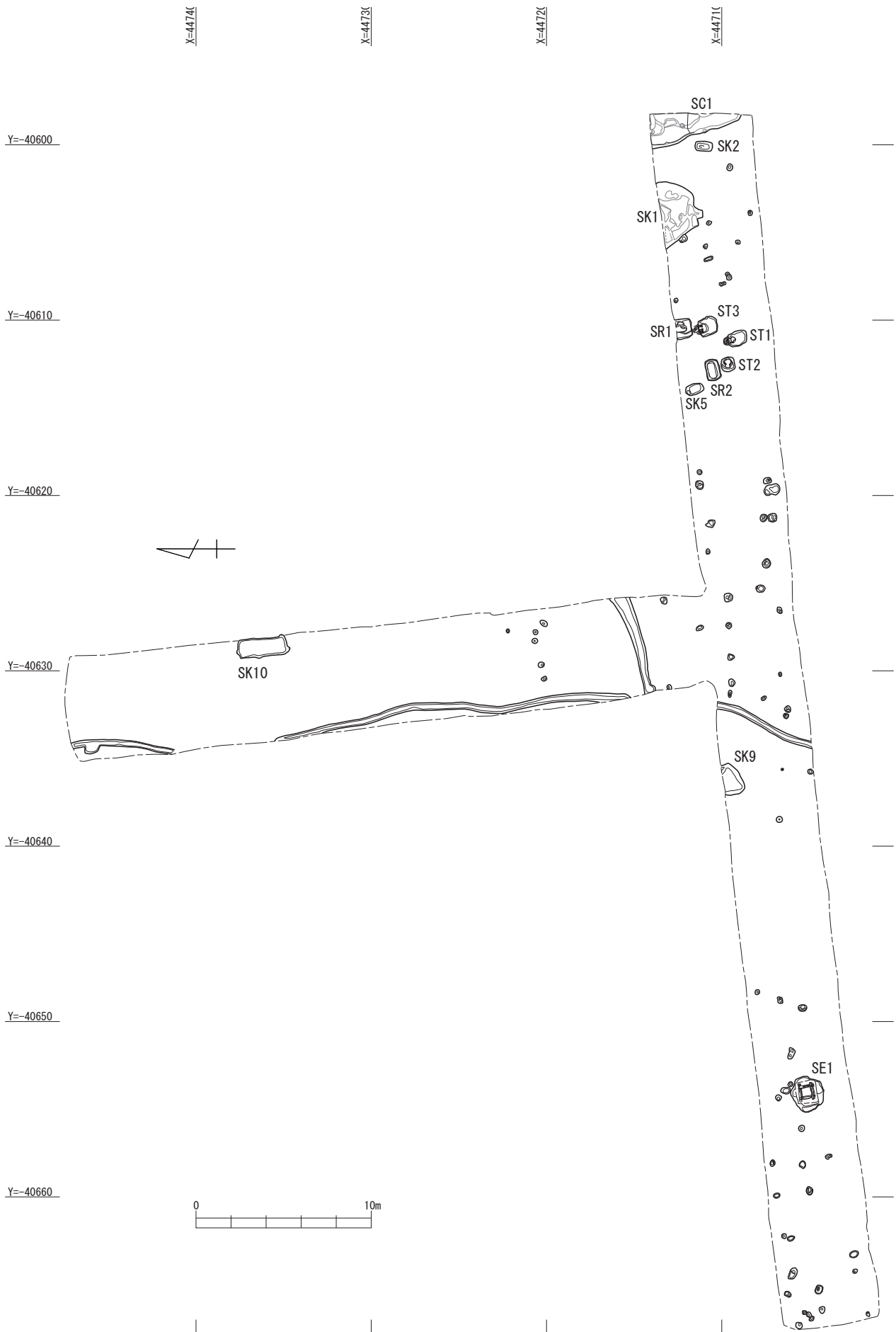
弥生時代前期前半から津古土取遺跡(4)で集落が形成され、三国の鼻遺跡(5)では土壙墓、木棺墓、甕棺墓の墓群を確認。そして、前期中葉～後葉になると人々の活動痕跡が急増し、一ノ口遺跡(6)をはじめとして三国丘陵で遺跡の増加が激しくなる。中期になると大板井遺跡の全盛期となり、周辺の小郡遺跡(7)や小郡若山遺跡を含めた南北約700m、東西約1000mの広大な範囲にわたって当時の中核的な集落を構成していたと考えられ、1980年（昭和55年）の大板井遺跡1次調査ではI区の北側からV字溝を確認。その大きさは深さ約2m、幅約3mを測り、北側に続く台地を切断する意図があったと考えられる。また、この時期の大板井遺跡の各所では住居や墓域、祭祀土坑など多様な遺構とこれに伴う遺物が確認されている。その後、後期は中期と同様の場所に数多くの集落が形成されているが、古墳時代から古代に向かって集落の規模は縮小していった。

古墳時代から古代にかけて集落は一旦廃絶するが、律令期に小郡遺跡の所在地に筑後国御原郡衙に比定される小郡官衙遺跡(13)が成立。当時の官衙を取り巻く人々の活発な活動が窺え、大板井遺跡10次では「正倉」と見られる3×4間規模の総柱建物が3棟、18次では官衙の正倉群やその関連と推定される版築状盛土の造成跡など、この時期に官衙隣接地として隆盛していたと思われる。現在の「大板井」という地名は平安時代の書物『和名抄』に記された御原郡4郷のうちの1つ「板井」に由来するとされている。

中世以降は集落が連綿と続き、旧筑前街道が通り活発な人々の往来があったと思われる。



第1図 大板井遺跡 調査区位置図 (S=1/5,000) 及び周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)



第2図 大板井遺跡 32 遺構配置図 (S=1/300)

第3章 調査の内容

大板井遺跡 32 地点で確認した遺構時期は、弥生時代 土坑 1 基、甕棺墓 3 基、土壙墓 2 基、古墳末～奈良 溝 2 条、廃棄土坑 1 基、竪穴住居址 1 軒、井戸 1 基、中・近世 土坑 2 基、時期不明落とし穴状遺構 1 基である。

弥生時代

土坑

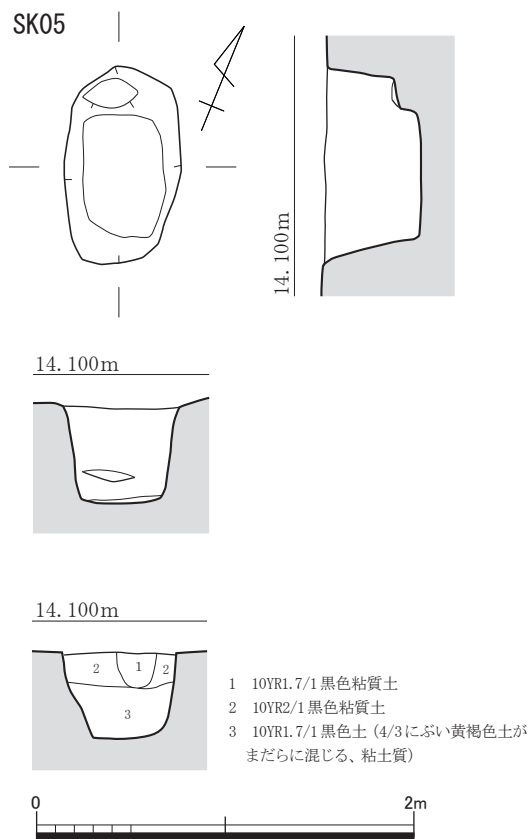
5 号土坑 (SK5) (第 3 図、図版 2-②)

調査区の東側、甕棺墓を含む南北に走る墓域の近い位置から検出している。長軸 1 m、短軸 0.6 m、深さ 0.5 m をはかる不定円形である。土坑内の北側に小さなテラスが確認出来る。出土遺物はわずかである。

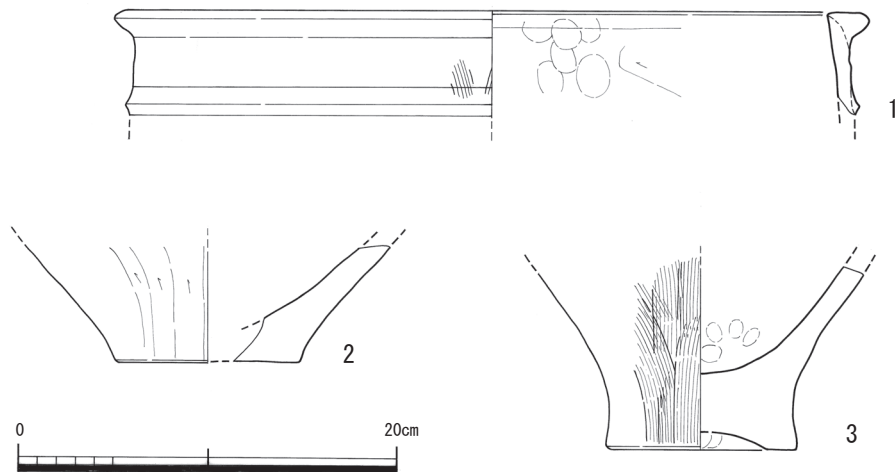
掘削当初、甕棺墓を含む墓域付近からの検出だったため、これも土壙墓と思われたが、他の土壙墓に比べて小さく墓に関する遺物が出土したが甕棺の一部分のみだったため土坑とした。

〔出土遺物〕 (第 4 図、図版 4-③)

1、3 は弥生土器の甕、2 は弥生土器の壺である。1 は L 字型の口縁で、口縁下から 3～4cm 下に突帯を 1 条めぐらせる。2 は壺の底部。2 の底面は平らで加工痕はなし。3 は底部。底面にユビオサエによる凹みがあり、外部底面と内部底面両方に黒斑がある。



第 3 図 5 号土坑 平面図・断面図 (S=1/40)



第 4 図 5 号土坑出土土器実測図 (S=1/4)

甕棺墓

ここで出土した甕棺は大きさからすべて、小児棺と思われる。しかし、ひび割れや潰れが激しいこと、周辺の土地が稲作などで水が湧く土地柄であることが起因して内容物は消失したと思われる。また、甕棺の時期や型式の同定に関しては、橋口達也氏の『甕棺と弥生時代年代論』（2005）を参考にさせていただいた。

1号甕棺墓（ST1）（第6図、図版2-③）

調査区東側に位置する。壺+甕の呑口式小児棺。墓壙平面は不整長方形を呈し、墓壙を横に掘り込み下甕を挿入している。埋置角度は地面とほぼ水平に位置する。

甕棺（第5図、図版5-ST1上・下）

上甕：KⅢb式併行期。突帯はなし。底面ユビオサエである。

下甕：口縁部・頸部を打ち欠く壺型土器。胴部最大径にM字状の突帯1条をめぐらせる。

2号甕棺墓（ST2）（第6図、図版2-④）

調査区東側に位置する中型壺の単棺で、墓壙平面は不整円形を呈し、壺口にテラスが残っている階段掘りである。埋置角度は地面とほぼ水平に位置する。

甕棺（第5図、図版5-ST2）

単棺：KⅡc式併行期。断面逆L字の口縁部を持つ壺棺で、頸部に突帯を1条、胴部最大径に三角突帯を2条めぐらせる。底面にユビナデ痕である。穿孔穴：外面最大径3～4cm、内面最大径7～8cmの内面からの打ち欠きである。

甕棺の外側胴部に黒色顔料による格子状の模様が確認できる。また、格子模様の反対には魂の抜け穴とされている内面からの穿孔穴も確認できる。当時の埋葬や死生観に関する思想が顕著に表れているものの中でも特筆すべきものである。

3号甕棺墓（ST3）（第6図、図版2-⑤）

調査区東側に位置する。中型甕の単棺で、墓壙平面は不定円形を呈し、テラスを有する二段掘りである。墓壙を横に掘り込み単棺を挿入している。埋置角度は地面とほぼ水平である。

甕棺（第5図、図版5-ST3）

単棺：KⅡb式併行期。口縁下に三角突帯を2条めぐらせる。底面ユビナデである。

口縁付近の墓壙内が広く掘られていることから木板などで蓋をしていたのではと思われる。

土壙墓

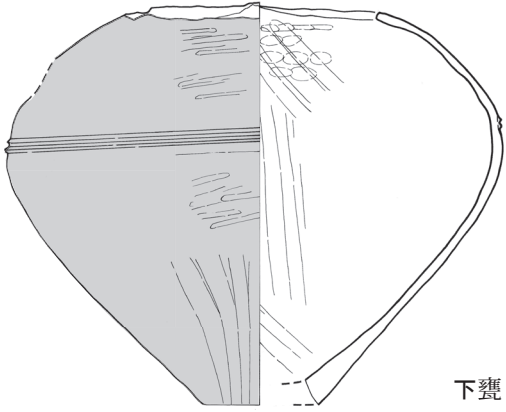
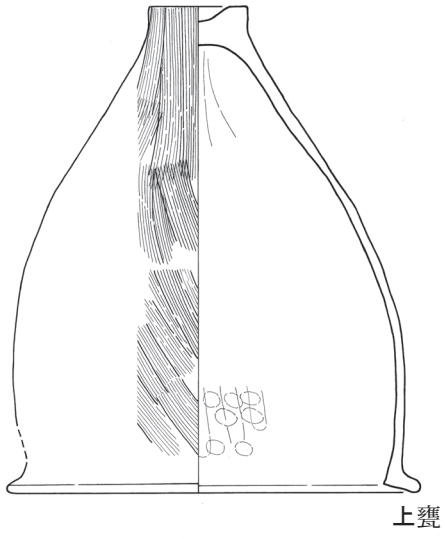
1号土壙墓（SR1）（第7図、図版2-⑥）

調査区東側に位置する。長軸1.2m、短軸0.9m、深さ0.8mをはかる。テラスは段階掘りで、中央を深掘りする。全体の半分ほどしか検出出来ず、北半分は調査区外にあたるため、本来短軸はこの倍以上はあろう。出土遺物はわずかに出土しているが図示していない。

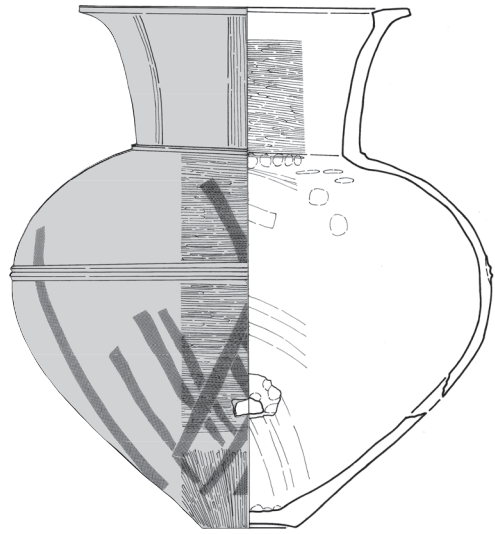
2号土壙墓（SR2）（第7図、図版2-⑦）

調査区東側に位置する。長軸1.2m、短軸0.8m、深さ0.6mをはかる不整長方形。墓壙内に遺構面から10cmの深さでテラスを有し、中央を深掘りする。出土遺物はわずかに出土しているが図示していない。

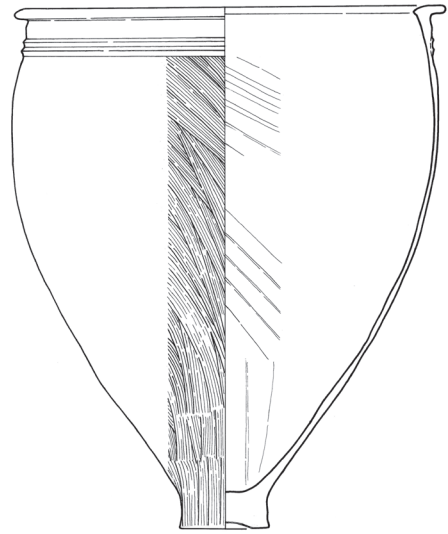
ST1



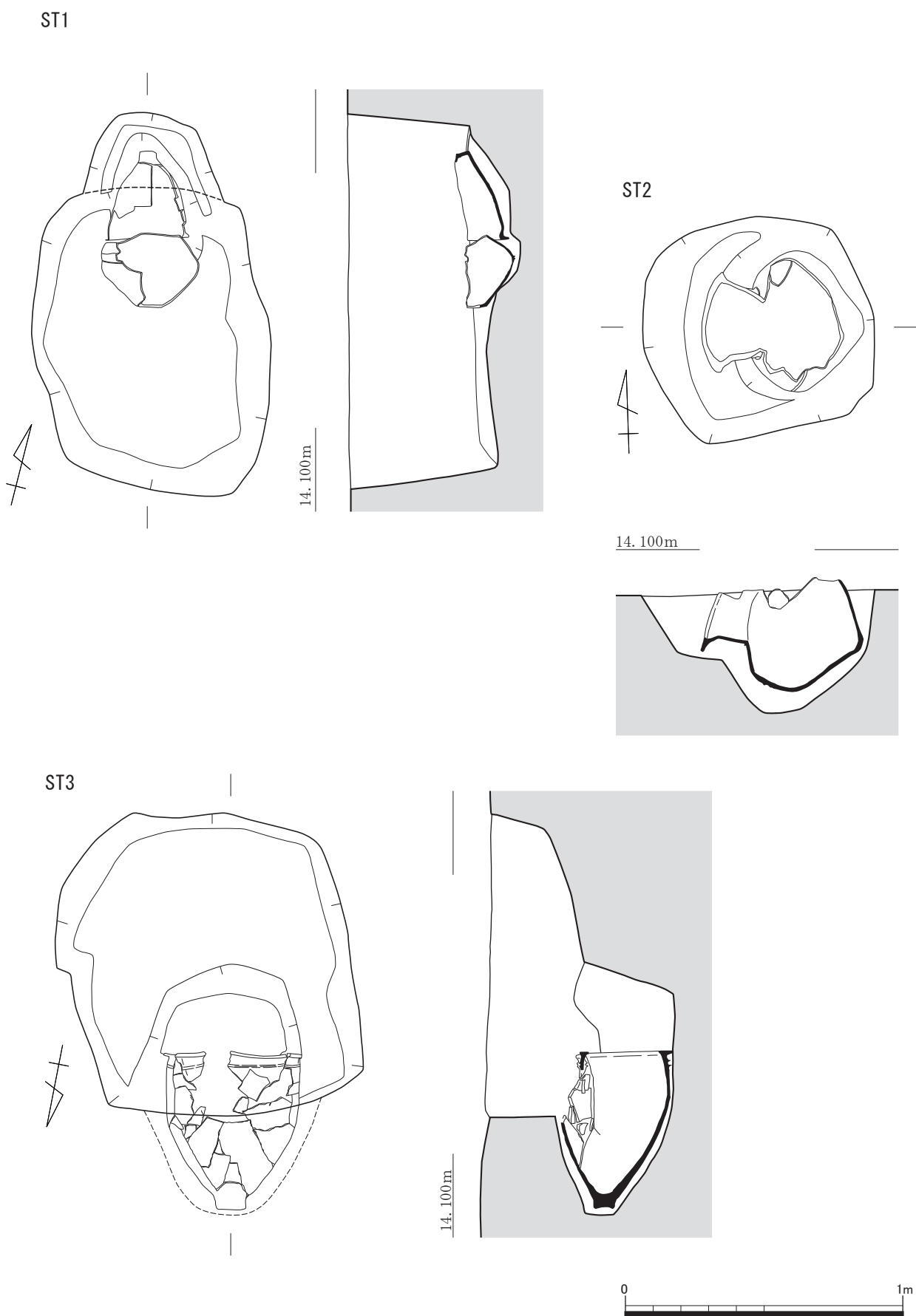
ST2



ST3

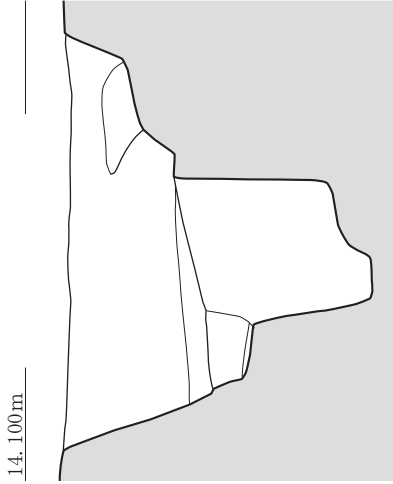
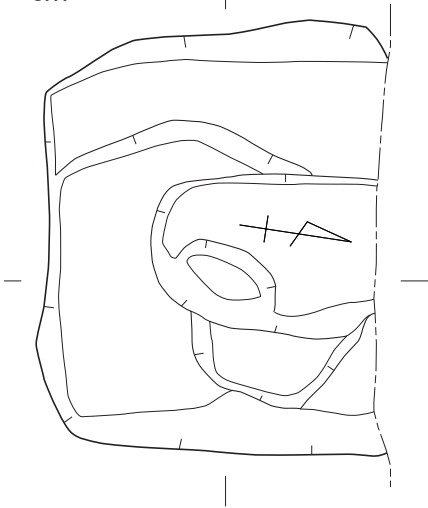


第5図 1号甕棺実測図 (S=1/5)、2号・3号甕棺実測図 (S=1/8)

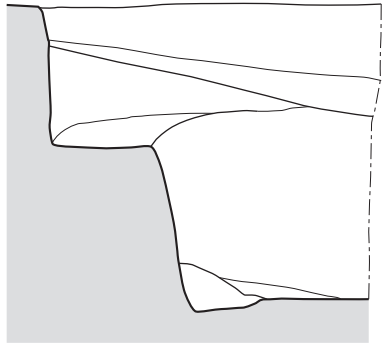


第6图 1、2、3号甕棺墓 平面图·断面图 (S=1/20)

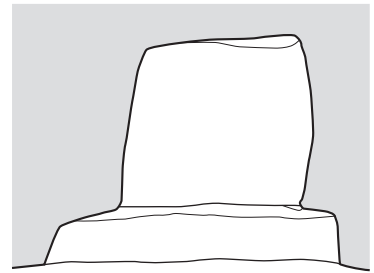
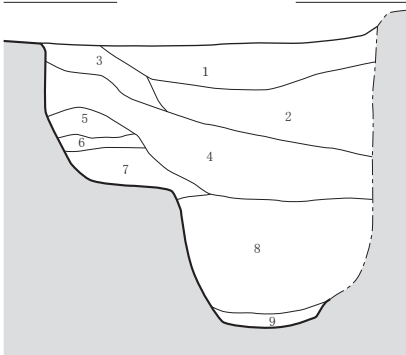
SR1



14.100m

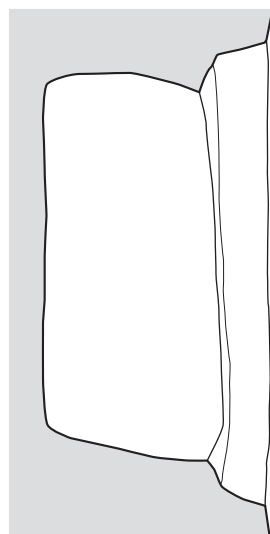


14.100m

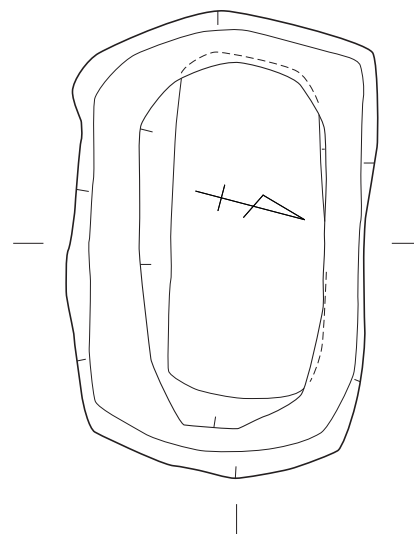


14.100m

SR2



14.100m



- 1 10YR3/1・3/2 黒褐色粘質土
- 2 10YR1.7/1 黒色土・3/2 黒褐色粘質土
- 3 10YR3/2 黒褐色土 (5/3 にぶい黄褐色がまだらに混じる、粘土質)
- 4 10YR1.7/1 黒色土 (3/3 暗褐色がまだらに混じる、粘土質)
- 5 10YR3/2 黒褐色粘質土
- 6 10YR5/4 にぶい黄褐色・5/6 黄褐色粘質土
- 7 10YR3/2 黒褐色粘質土
- 8 10YR1.7/1 黒色粘質土
- 9 5Y5/2 灰オリーブ色粘質土 (地山)



第7図 1号・2号土壙墓 平面図・断面図 (S=1/20)

古代（古墳末～奈良）

溝

1号溝（SD1）（第2、8図）

調査区の北端から南北を蛇行する形で検出。検出長は38m、幅35cm、深さ0.3mである。調査区の南北外まで続くため総延長距離は40m以上と推定。出土遺物は溝全体から出土。形態からして水路又は区画溝として使用されたとと思われる。

〔出土遺物〕（第9図）

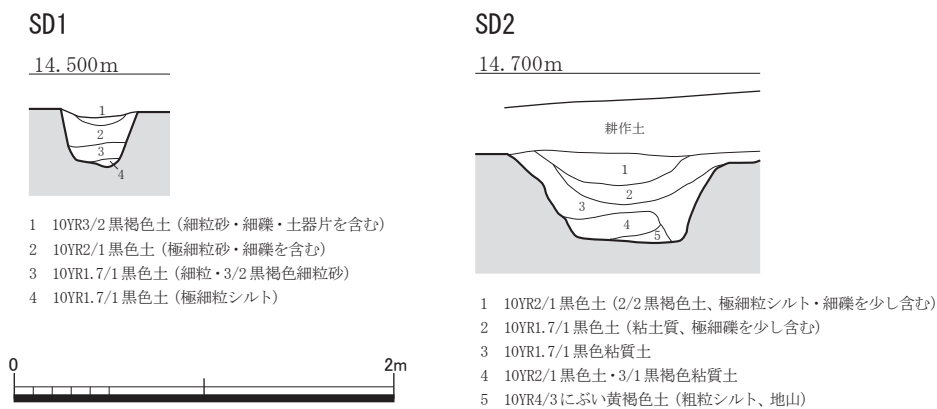
1～4は土師器、5～10は須恵器である。1は底の浅い杯。2、3は甕。4は土師器のミニチュア土器。器表に布目がわずかに確認できる。5は杯蓋。蓋の取っ手と思われる部分は欠損。6～8は杯身。焼きが甘く、色味にムラがある。8はさらに脚部が付く。9、10は甕。10は外面に線刻が斜めに入る。

2号溝（SD2）（第2、8図）

調査区の中央付近から東西に走る形で検出。検出長は6m、幅1.25m、深さ0.5mである。調査区外の東西にまで続くため総延長距離は少なくとも10m以上と推定。出土遺物はわずかである。形態からして水路又は区画溝として使用されたとと思われる。

〔出土遺物〕（第9図）

土師器の甕の取手片側のみである。



第8図 1号・2号溝 土層断面図 (S=1/40)

竪穴住居址

1号竪穴住居址（SC1）（第11図、図版3-①、②）

調査区の東端、標高14.1m付近に位置する。住居全体は見え、住居辺も西側一辺しか確認できず、北端が調査区外ではっきりと断定できないが5.2mほどである。床面から柱穴が1つだけ確認でき、深さ24cmをはかる。埋土からも床面からも土器が出土。出土遺物の割合からみて、後述の廃棄土坑と同時期と思われる。担当者のミスにより南半分の貼り床面の写真・図面を残せなかった。

〔出土遺物〕（第10図）

1は土師器の甕。2は須恵器の杯。後付の脚部がわずかに残っている。

廃棄土坑

1号廃棄土坑 (SK1) (第12図、図版3-④、⑤)

調査区の東側、1号住居と墓域の間から検出。長軸4m、短軸2.5m、深さ0.6mをはかる不定形である。本土坑は北側が調査区外にあたり南半分しか確認出来ない。また、捨てられてあった遺物も、遺構検出面の壁際付近にかたまつて出土し、いくつかは壁に埋まっていたため調査区外にも続くと推定する。出土遺物は廃棄土坑内にもわずかにある。遺物のほとんどが遺構検出面からの出土であり、瓦に関しては、土器よりも上の層からの出土である。

〔出土遺物〕(第13図、図版3-③、図版4)

1～8は土師器、9～13は須恵器である。1は杯。底部の調整は摩滅により不明である。2は高杯。脚部内側は細い棒状の道具でのナデと思われる。3～5は甕。6、7は甌。6は7より大きさが少し小さく、黒斑が外面の一部にのみ。7は6と比べて器表の摩滅が激しく黒斑は底径内外に付着している。8は小型の甕。9、10は杯身。9にはヘラ記号あり。11は長頸壺。12は壺。頸部以上が欠損。13は横瓶。胴部に回転ナデによるならしがある。

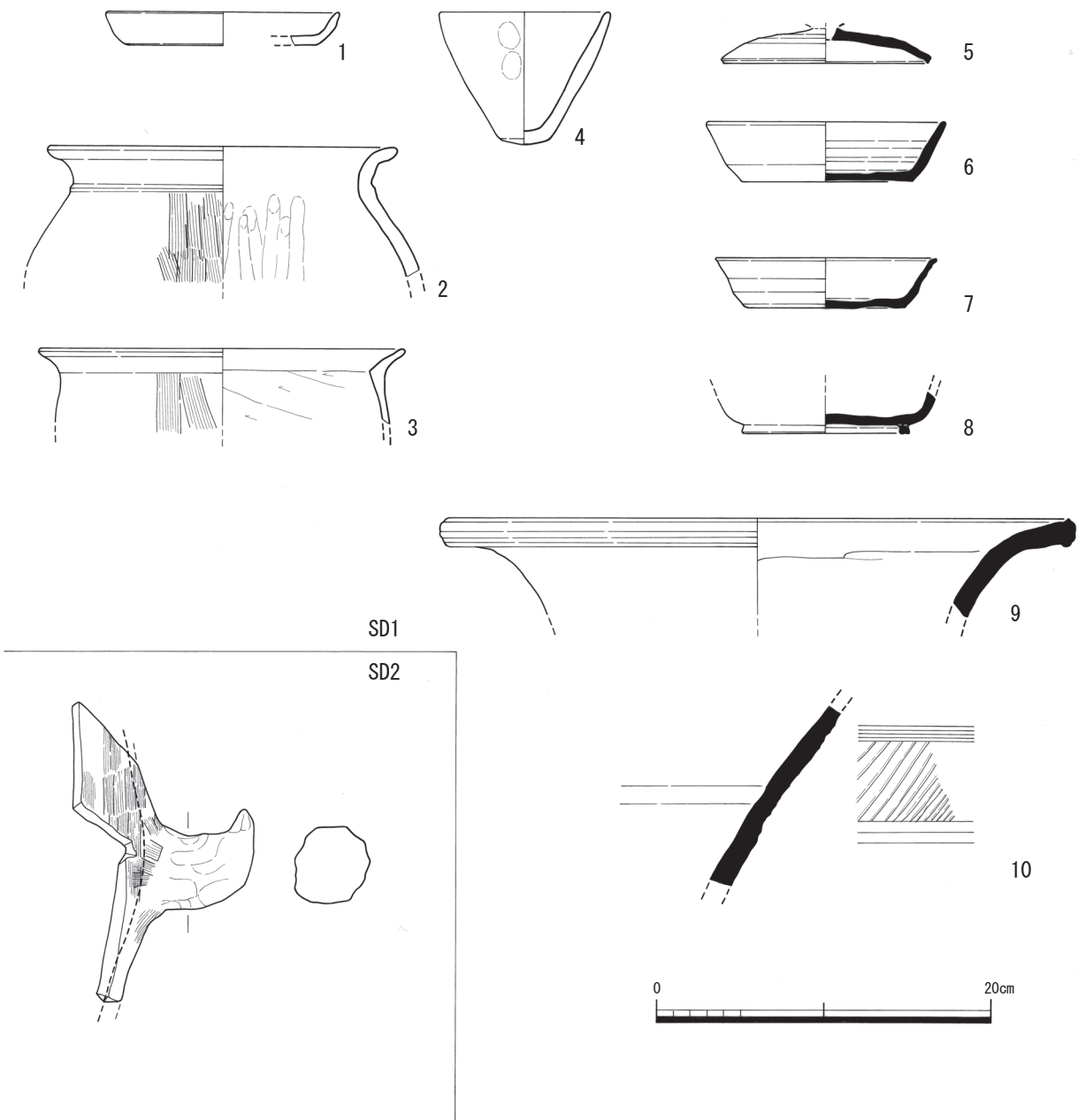
〔出土瓦〕(第14、15図、図版5)

1～5はすべて平瓦である。1は長軸42cm、短軸25cm、厚さ2cm。外面は対角線が25×12mmを測る菱形斜格子のタタキで内面は布目、側面はヘラケズリである。タタキ面がやや薄い。2は長軸46cm、短軸31cm、厚さ2cm。外面は対角線が25×12mmを測る菱形斜格子のタタキで内面は布目の上からハケナデで、布目がほとんど消えている。側面はヘラケズリである。タタキ面がやや薄い。3は長軸37cm、短軸14cm、厚さ2cm。外面は対角線が30×15mmを測る菱形斜格子のタタキで内面は布目、側面はヘラケズリである。4は長軸20cm、短軸11cm、厚さ2cm。外面は対角線が21×13mmを測る菱形斜格子タタキで内面は布目、側面はヘラケズリである。5は長軸15.5cm、短軸15cm、厚さ2cm。外面は一辺6mmの方形格子のタタキで内面は布目、側面はヘラケズリである。どのタタキ面も、一部重ね打ちが見られる。また、3の中央あたりにタタキ道具の長さが確認出来る跡がある。長さ13cm、幅は不明である。

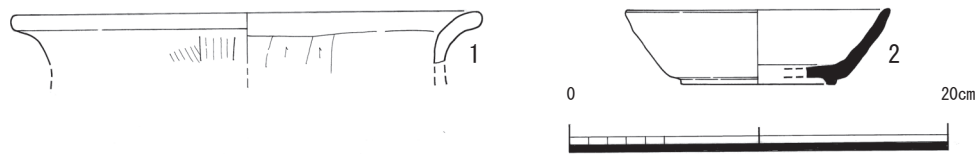
井戸

1号井戸 (SE1) (第16図、図版3-⑧)

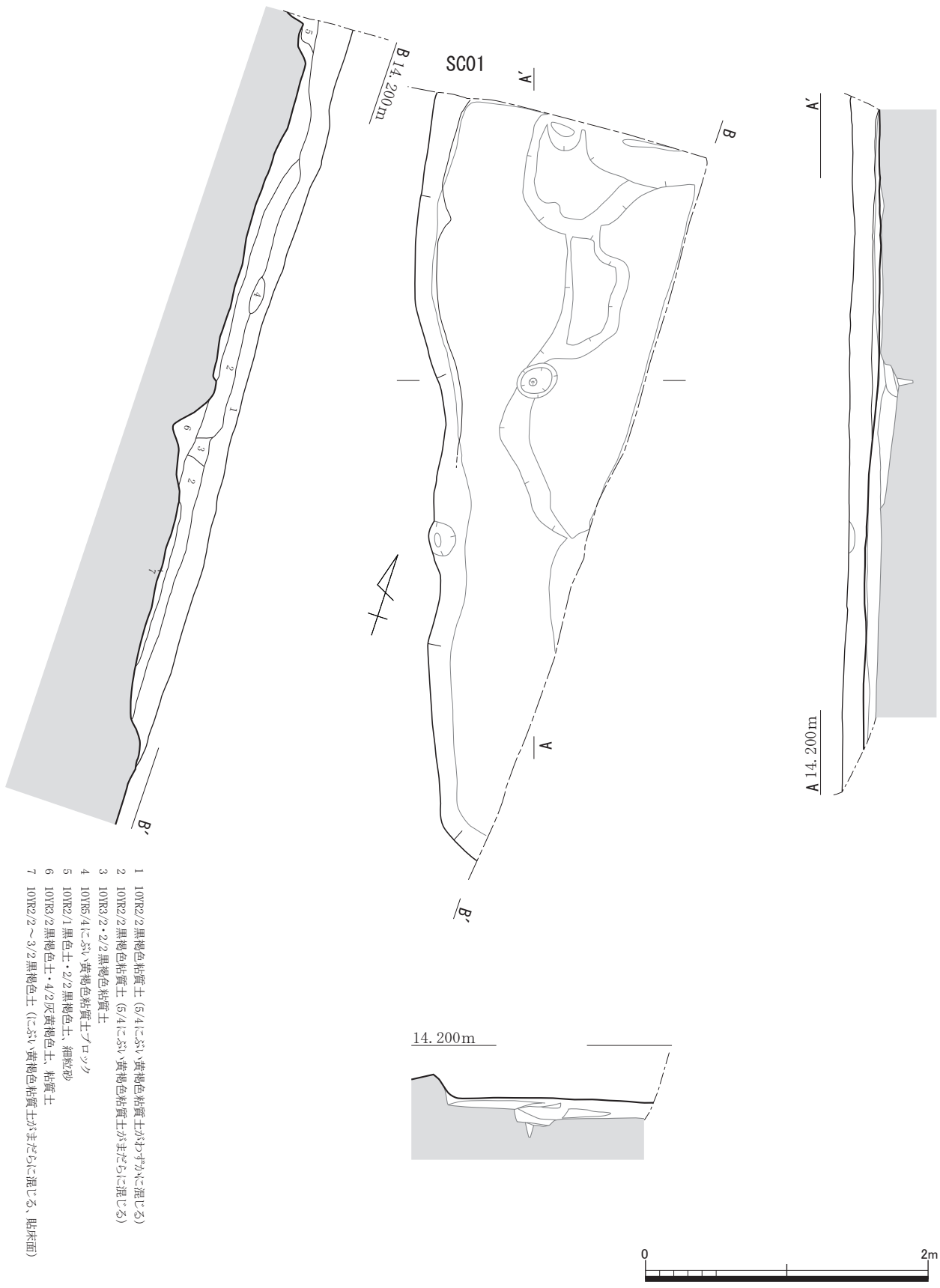
調査区の西側、標高14.2mから検出。直径2～2.5m、深さ最大1.2m。標高13.9mまでにテラスを構え、これより下を1辺約1.2mの方形で深く掘り込まれたところに標高13.7mから13.2mの高さで二段組みの木枠を有する不整円形。上段は一本の細い木材を加工したもの、下段は樹皮がついたままの太い幹部分を半裁し、左右の上下が少し凹む形と、突き出る形をそれぞれ一対ずつ向き合う位置で組まれている(横板組み構造支持材無し 相欠き井籠組み式)。後述するが、樹種同定には残っていた樹皮からすべてカシ材と推定する。井戸という性質上、上段より下段がよりしっかりと残っている。出土遺物は木枠外(木枠より上の埋土)が多く出土し、木枠内は少し、木枠外は内よりすこし多いほどである。木枠外の遺物は図示するに耐えうるものがなかった。遺物量からみて井戸を埋める際の祭祀を行った可能性がある。



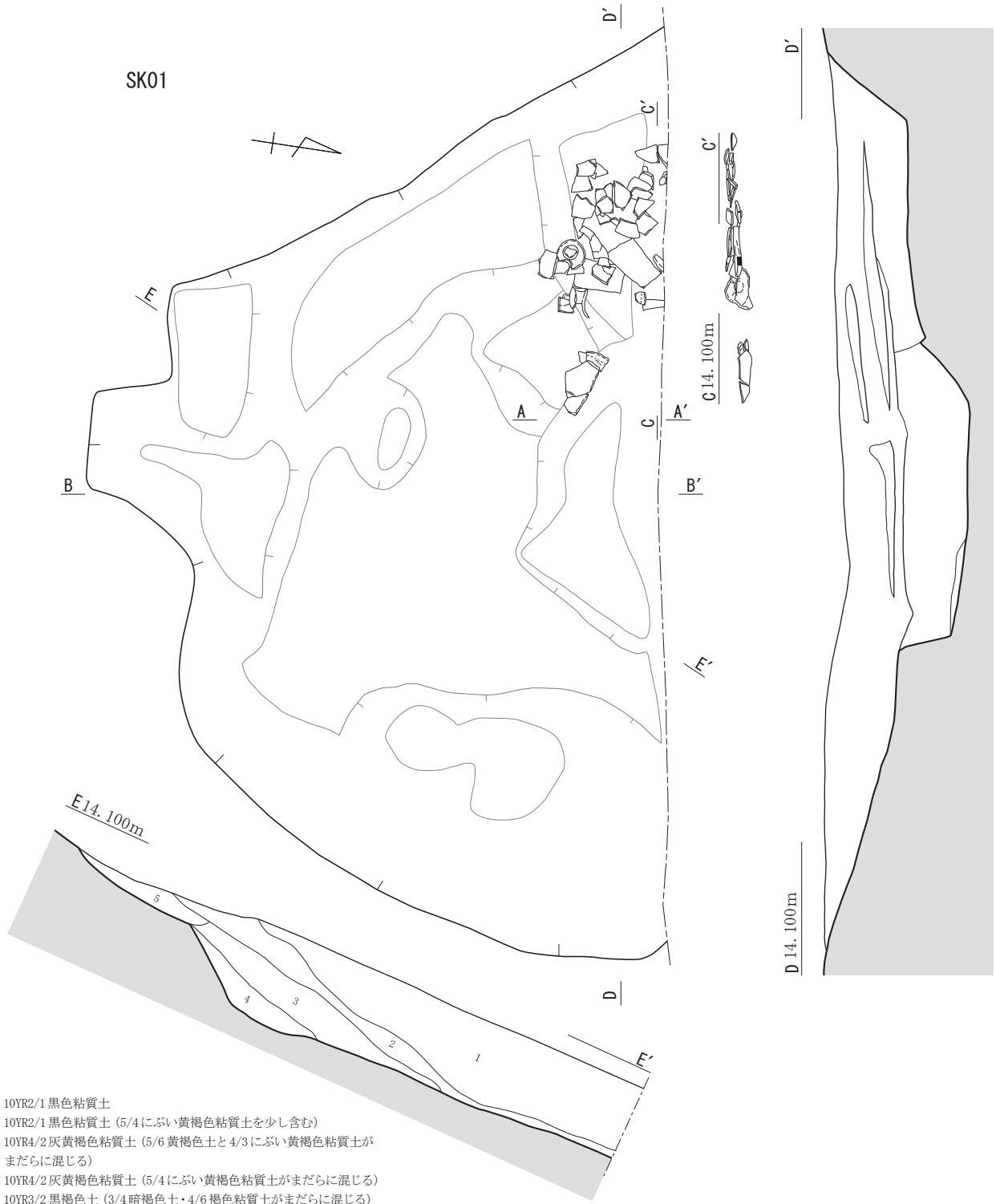
第9图 1号・2号溝出土土器実測図 (S=1/4)



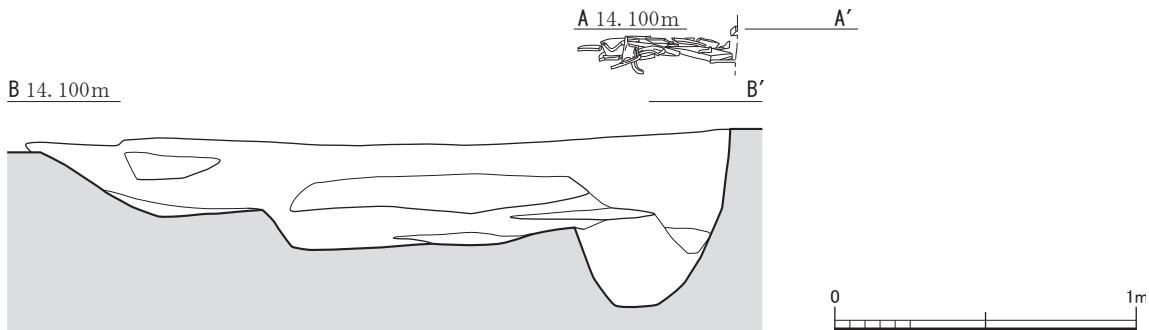
第10图 1号竪穴住居址出土土器実測図 (S=1/4)



第 11 図 1 号竪穴住居址 平面図・断面図 (S=1/40)



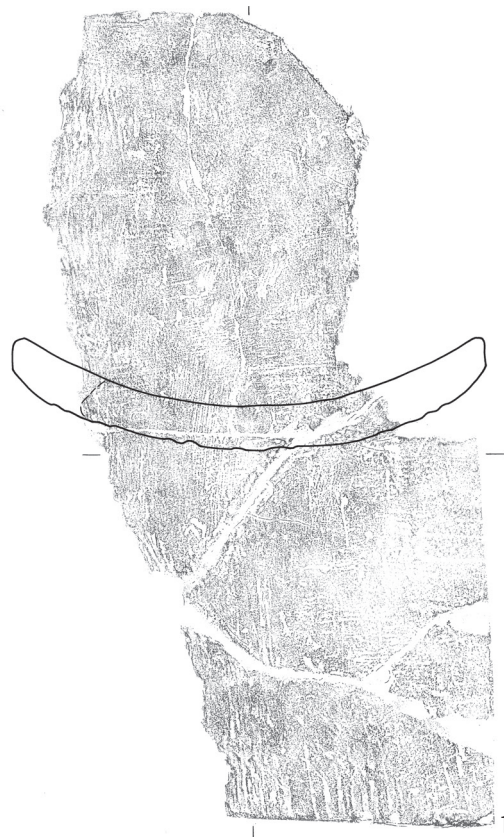
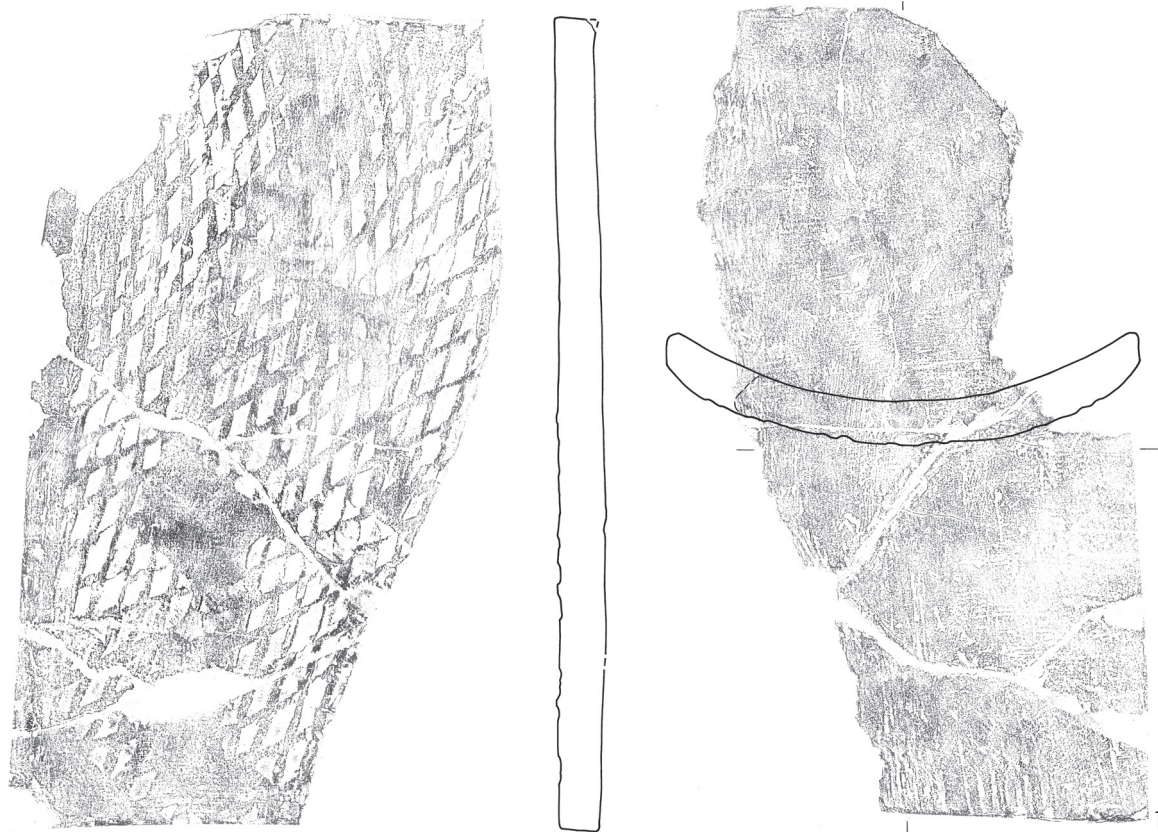
- 1 10YR2/1 黒色粘質土
- 2 10YR2/1 黒色粘質土 (5/4にぶい黄褐色粘質土を少し含む)
- 3 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (5/6黄褐色土と4/3にぶい黄褐色粘質土がまだらに混じる)
- 4 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (5/4にぶい黄褐色粘質土がまだらに混じる)
- 5 10YR3/2 黒褐色土 (3/4暗褐色土・4/6褐色粘質土がまだらに混じる)



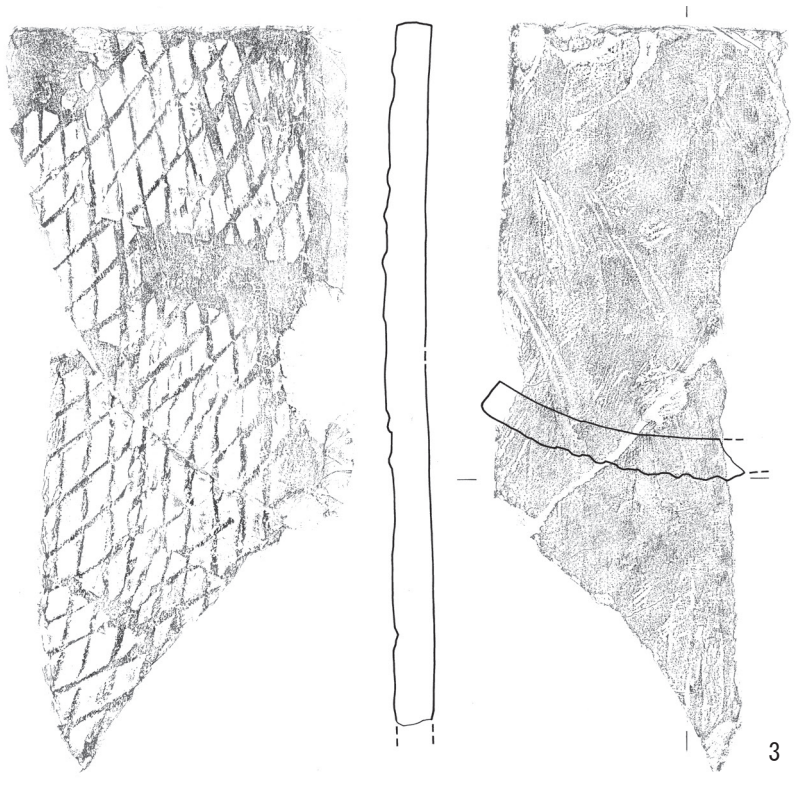
第 12 図 1 号土坑 平面図・断面図 (S=1/25)



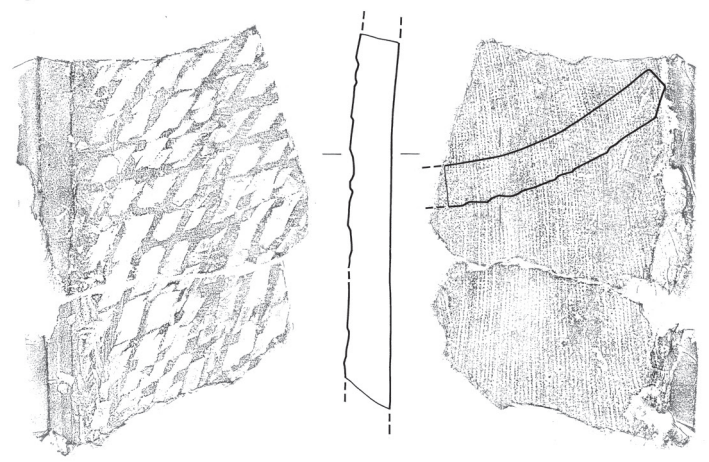
第 13 图 1 号土坑出土器实测图 (S=1/4)



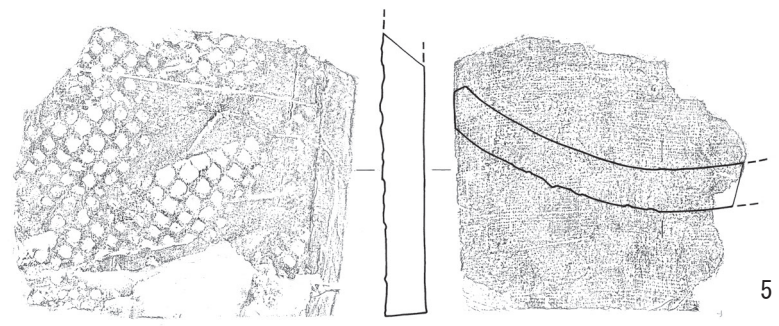
第 14 图 1 号土坑出土瓦实测图① (1:S=1/4、2:S=1/5)



3



4



5



第 15 图 1 号土坑出土瓦实测图② (S=1/4)

〔出土遺物〕（第 17 図）

木柾外 1～13 は土師器、14～21 は須恵器。1～9 は甕の口縁部分のみ。1、4、5 は外ハケで他は摩滅し調整不明である。10 は杯の底部。11 は杯。12 は杯の口縁部のみ。13 は甕の取手片側のみ。取っ手の根元に甕本体に接着するように強めのハケナデがある。14、15 は杯蓋。15 は取っ手があったと思われるが欠損で確認出来ない。16 は皿。17、18 は杯。18 には脚部が付く。19、20 は杯蓋。19 は返りがあり杯身の可能性がある。21 は鉢と思われる。木柾内上層 22、23 ともに土師器の甕の口縁部分のみ。22 にもみ口縁下に黒斑あり。木柾内下層 24 からは弥生土器の甕の口縁一部分のみ。

〔木柾〕（第 18、19、20 図、図版 6）

井戸木柾は総数 8 本を確認した。しかし、上段東西南の 3 方向の木柾は、検出時と取り上げ時ですでにほとんど崩壊していたこと、加工痕が風化・劣化により確認出来なかったため図示していない。上段北方向から木柾④と図示し、下段東西南北の順番で木柾⑤～⑧と図示している。

④：上段北は最大長 76.8cm、最大幅 22.5cm、最大厚 15.7cm の左右の上下が少し凹む形である。刀子や手斧による加工。裏面のみ未加工である。形成層が残っている。東部の凹み部分より先は木柾検出時点で凹み部分が風化により欠損している。

⑤：下段東は最大長 91.1cm、最大幅 26.7cm、最大厚 14.6cm の両端の下方と裏の一部を加工した突き出る形である。刀子や手斧による加工。上部のみ未加工である。形成層が残っている。裏面は樹皮を剥いだと思われる。

⑥：下段西は最大長 94.1cm、最大幅 25cm、最大厚 15.7cm の両端の下方と裏の一部を加工した突き出る形である。手斧による加工。上部のみ未加工である。形成層に加え、樹皮も残っている。左端に丸い穴を確認した。木柾以前にどこかの建築材として使われたと思われる。

⑦下段南は最大長 100.7cm、最大幅 32.6cm、最大厚 18.3cm の上方が凹む形である。刀子や手斧による加工。裏面のみ未加工である。形成層に加え、樹皮も残っている。両端に手斧の加工痕が多数見られることや木柾内面の加工痕に何度か刃が止まった跡があることから相当堅い幹部分を使用していると思われる。

⑧：下段北は最大長 97.8cm、最大幅 26.3cm、最大厚 18.3cm の上方が大きく、下方が少し凹む形である。刀子や手斧による加工。裏面のみ未加工である。形成層に加え、樹皮も残っている。下部の凹みの加工は刀子などできれいにした様子がないことから手斧を数回入れ、打ち欠いただけと思われる。

中・近世

土坑

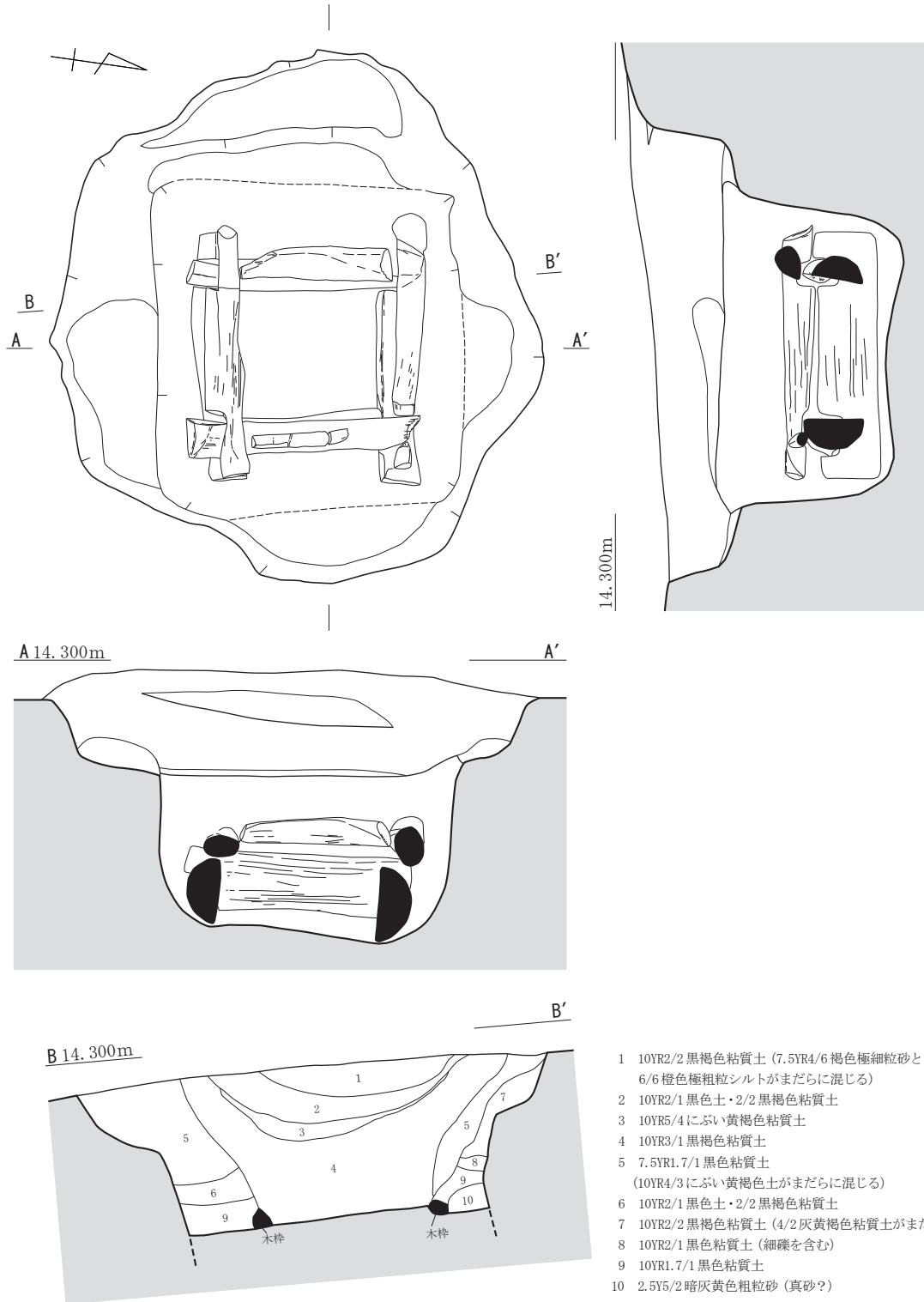
9 号土坑（SK9）（第 21 図）

調査区の中央付近から検出。長軸 1.9 m、短軸 1.2 m、深さ 25cm をはかる不定形である。北側が調査区外にあたり南半分しか確認出来ない。壁際にわずかにテラスが残る。出土遺物はわずかに出土しているが図示していない。

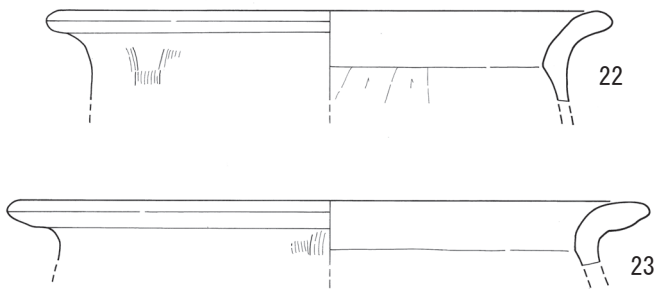
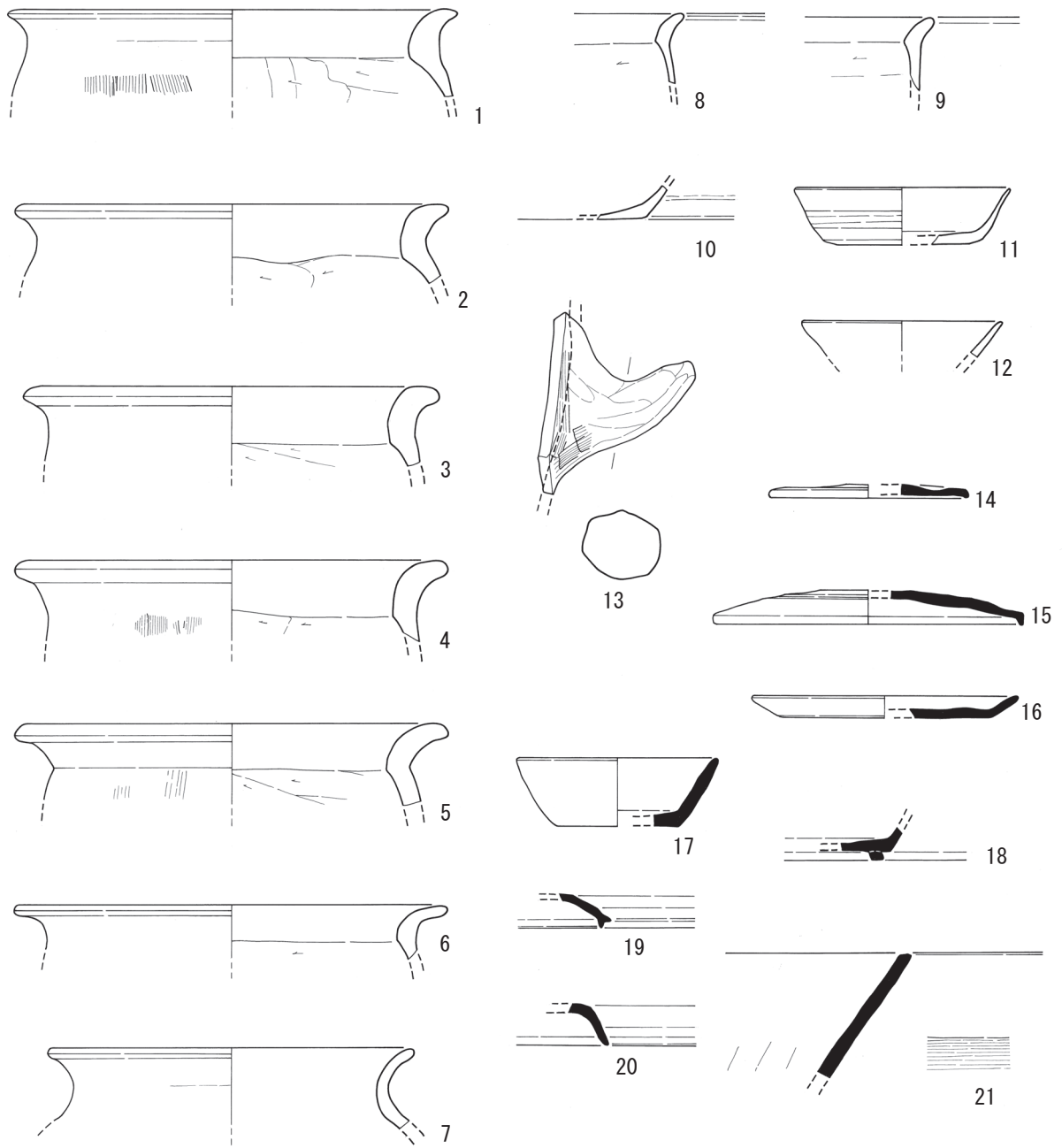
10 号土坑（SK10）（第 21 図、図版 3－⑦）

調査区北側から検出。長軸 3 m、短軸 1 m、深さ 20cm をはかる不整形長方形である。出土遺物はわずかに出土しているが図示していない。当初、土坑の形態や大きさからみて土壇墓と思われたが、墓に関する物が見られなかったこと、遺物が陶磁器類のみだったため混ざり込みの土坑とした。

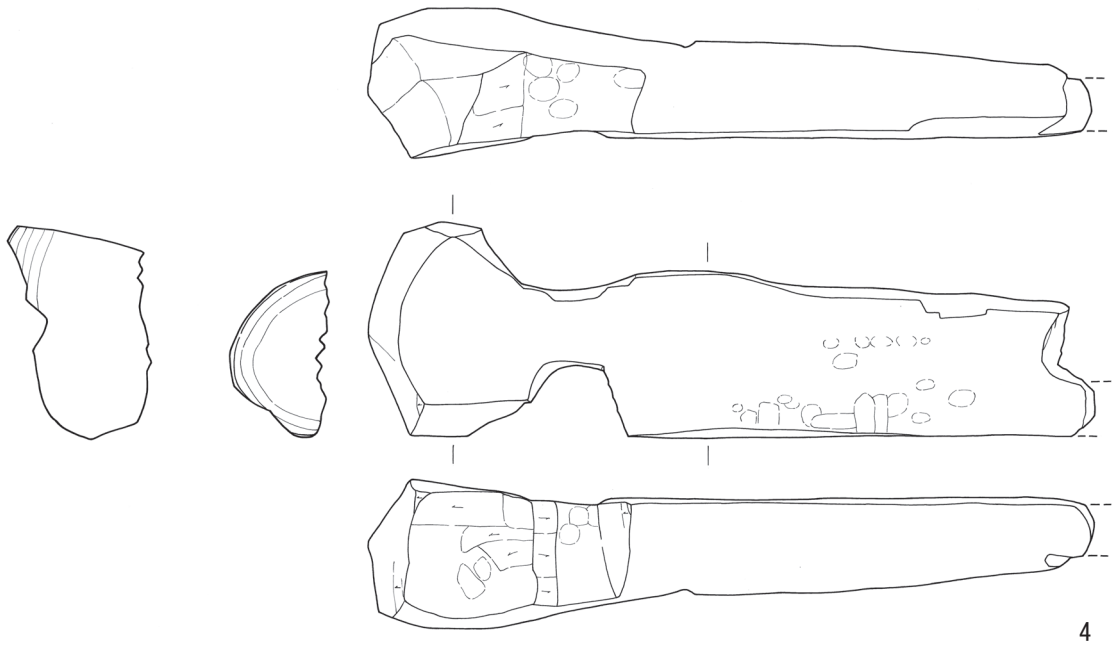
SE1



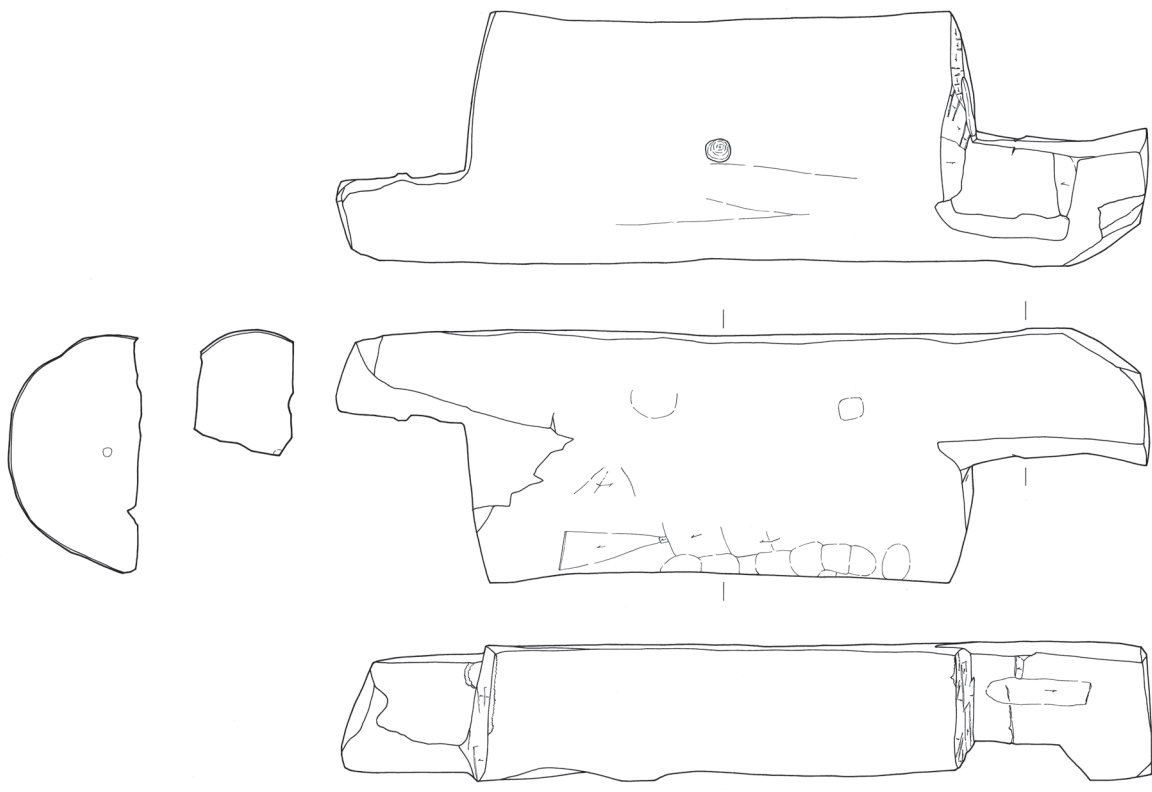
第 16 図 1 号井戸 平面図・断面図 (S=1/25)



第 17 图 1 号井戸出土土器実測図 (S=1/4)



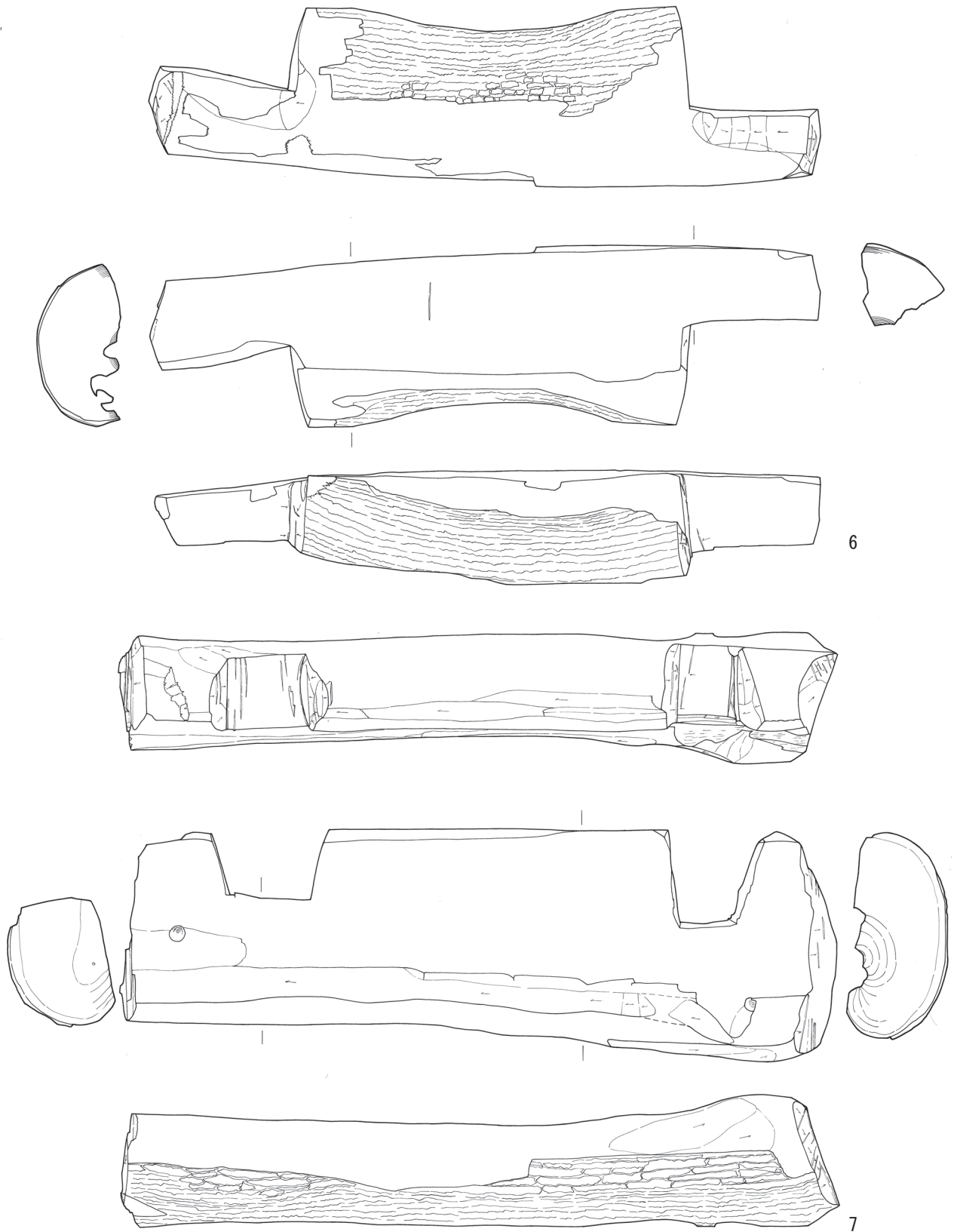
4



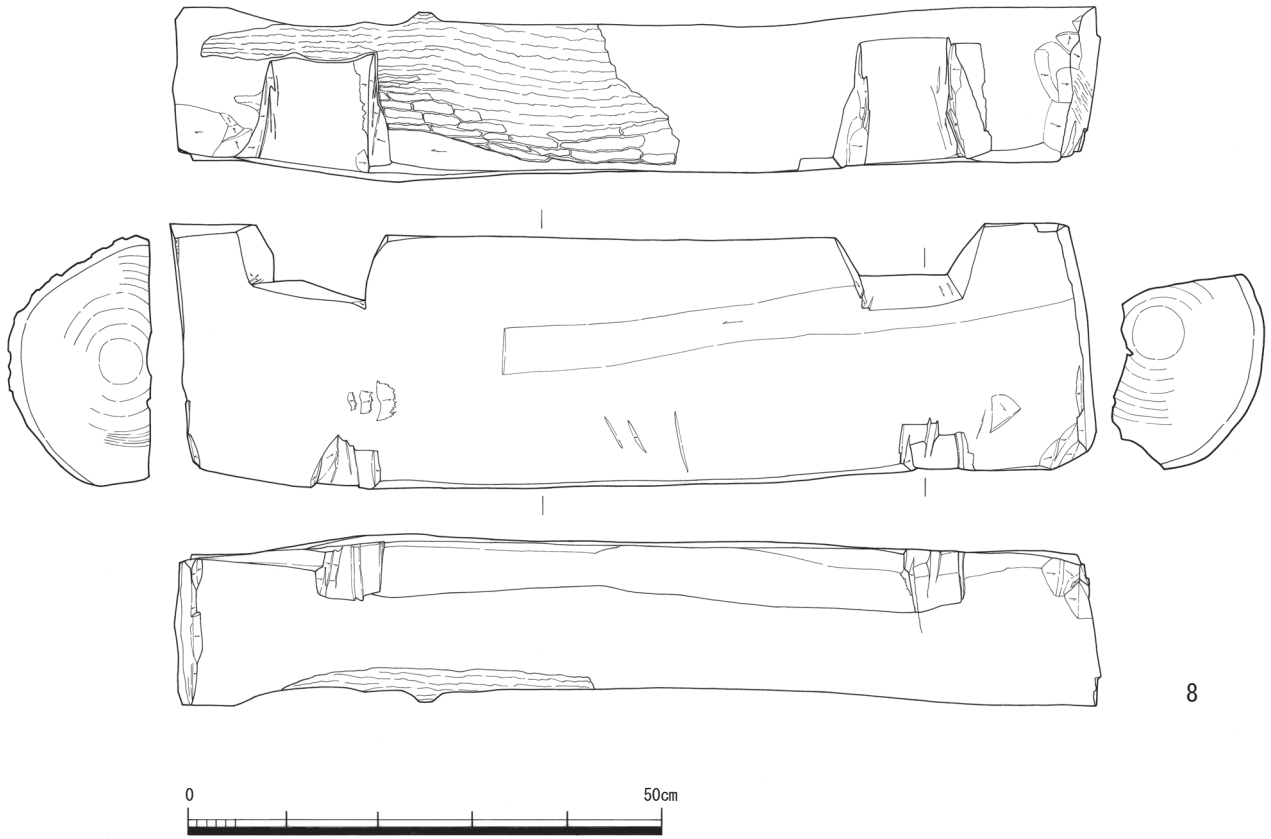
5



第18図 1号井戸出土木杵④、⑤実測図 (S=1/8)

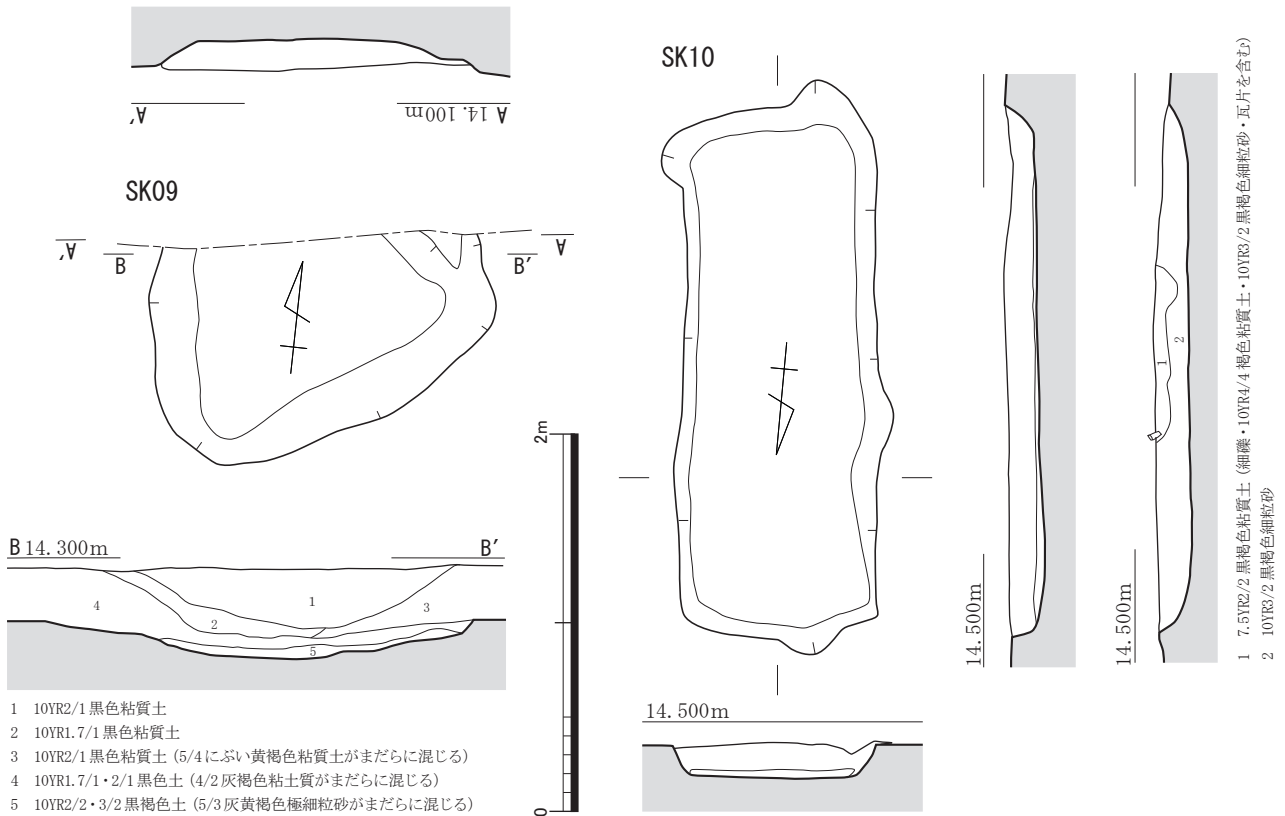


第 19 図 1 号井戸出土木杵⑥、⑦実測図 (S=1/8)



8

第20図 1号井戸出土木杵⑧実測図 (S=1/8)



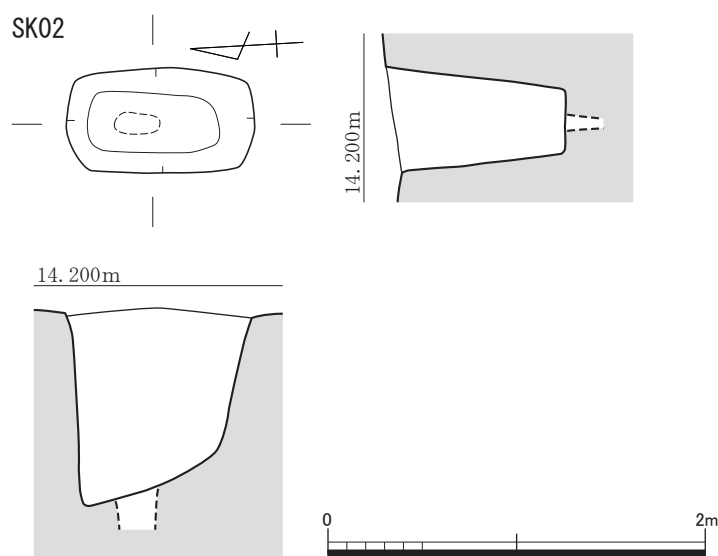
第21図 9号・10号土坑 平面図・断面図 (S=1/40)

時期不明

土坑

2号土坑 (SK2) (第22図、図版3-⑥)

調査区の東端、1号住居のすぐ西に位置する。長軸1m、短軸0.4m、深さ最大1mをはかる不整形長方形である。中心よりすこし北にずれてさらに深くなるピットが下層より検出する。しかし、土坑自体が小さく、湧き水により完掘を断念。出土遺物はわずかに出土している。土器は図示していないが上層からのみですべて弥生土器である。土坑の形態からみて縄文時代の落とし穴と思われる。



第22図 2号土坑 平面図・断面図 (S=1/40)

第4章 調査成果のまとめ

今回の大板井遺跡32次調査での総評として弥生中期から古代にかけての複合遺跡と判明した。大板井遺跡はこれまでに31回の調査を行ってきたが、その成果の多くは今回の調査区と同様に拠点集落としての姿を見せる弥生時代と、小郡官衙前後に相当する古代にかけての時期があり、今回発見した遺構の多くが同様の時期に当たると考えられる。そこで、それぞれの遺構の時期的変遷をまとめ、その中でも3点の遺構の課題をあげる。

大板井遺跡32の遺構の時期とその変遷について

今回の調査で確認した遺構のうち、時期が明確なものが以下の通りである。

・弥生時代

弥生中期前葉～中葉：2号甕棺墓・3号甕棺墓

弥生中期中葉～後葉：1号甕棺墓

次に、遺構形態や出土遺物などで時期がある程度推定できた遺構が以下の通りである。

- ・縄文時代 : 2号土坑
- ・弥生時代 : 5号土坑
 - 弥生中期～後期 : 1号土壙墓・2号土壙墓
- ・古墳末～奈良 : 1号土坑、1号竪穴住居址、1号井戸、1号溝・2号溝
- ・中～近世 : 9号土坑・10号土坑

以上が32次での各遺構の時期と変遷である。概要としてまず、弥生時代中期の墓群について。出土した甕棺の型式から弥生中期ごろの墓域であると考えられる。これは、大板井遺跡が隆盛した中期ごろと時期が一致するため、これらのことから大板井遺跡北東部に墓域が存在したことを示す。また、調査区内の墓域があるところから約10m北の調査区外地点で、開発業者による整地中に突如陥没穴が出来た。このことからおそらく、墓域が北に10m以上先まで点在していると思われる。次に、古墳末から奈良にかけての竪穴住居址について、調査区の東端から住居の一部のみの検出だが、その隣に廃棄土坑、さらにその西に井戸跡を確認。これらの生活痕と思われる遺構などから、小郡官衙前後の時期に官衙付近で生活していたと思われる。

大板井遺跡 32 の遺構の課題

今回の調査で課題となる事柄がみえてきた。

まず1つ目が、弥生中期ごろの墓群である。2号甕棺の胴部には黒色顔料による格子状の模様の他に、魂の抜け穴とされている内側からの穿孔穴も確認。しかし、過去の調査でも黒色顔料による模様は確認しているが、格子状の模様はほとんど類を見ない。また、穿孔穴に関しても外側からの穿孔は確認しているが、内側からの穿孔もほとんど類例がない。これらは当時の死生観に関する貴重な資料と言える。筆者は2号甕棺墓としているが、大半の壺への模様などは祭祀に関する遺構からの出土が多いため、2号甕棺墓が祭祀土坑となり得る可能性も捨てきれないと考えている。

次に2つ目が、古代のものと思われる井戸である。今回出土した井戸の木枠樹種の同定は樹皮の目視によるもので、炭素年代測定法など化学的分析は行えなかった。なので、今回は出土した遺物によるおおまかな時代推定となった。木枠の樹種同定と年代測定に関しては今後の課題である。

最後に3つ目が、古代ごろと思われる廃棄土坑である。7世紀ごろには激減したと思われる横瓶のほぼ完形とともに8世紀前半ごろと思われる長頸壺といった時期がまるで違うものがほぼ同じ層位から出土している。こういったことにより廃棄土坑の時期決定は難航していたが、今回は8世紀初頭～8世紀末頃と推定して報告する。

参考文献

- 小郡市教育委員会 1998 『井上廃寺1』
- 小郡市教育委員会 2014 『大板井遺跡 26・27』
- 小郡市教育委員会 2016 『大板井遺跡 29』
- 小郡市教育委員会 2023 『大板井遺跡 30』
- 橋口達也 2005 『甕棺と弥生時代年代論』
- 埋蔵文化財研究会 2013 『第62回 埋蔵文化財研究集会 続・井戸再考 ―古墳・飛鳥時代の井戸―』

出土遺物観察表

※1号土坑の平瓦と、1号井戸の木枠は本文に記載。

質量=口：口径、頭：頭部径、底：底径、高：残存器高
器種=弥生：弥生土器、土：土師器、須：須恵器

挿入番号	出土遺構	器種	質量 (cm) (復元値)	色調	胎土	焼成	成形・調整方法	備考	実測番号
第4図1	SK5	弥生・壺	口:(40) 高:5.5	内:淡黄色 外:淡黄色	径4mm以下の長石・石英・雲母を多量に含む	やや不良	口:後付ヨコナデ 内:ユビナデ・オサエ 外:ハケ		1
第4図2	SK5	弥生・壺	底:(10) 高:6	内:にぶい黄褐色 外:にぶい黄褐色	径4mm以下の長石・石英・雲母を多量に含む	やや不良	底:ユビナデ 外:ヘラケズリ・ミガキ		2
第4図3	SK5	弥生・壺	底:(10) 高:9.6	内:黒色 外:褐色	径4mm以下の長石・石英・雲母を多量に含む	やや良	底:ユビオサエ 内:ユビオサエ 外:タテハケ	底部・内面に黒斑	3
第5図 ST1上	ST1	弥生・壺	口:27.5 底:6.4 高:31.5	内:淡黄色~にぶい黄色 外:淡黄色	径4mm以下の長石・石英を多量に含む	良	口:ナデ 底:ユビオサエ 内:ヘラナデ・ユビナデ 外:ハケ		ST1上
第5図 ST1下	ST1	弥生・壺型壺	頸:16.5 底:7.6 高:26	内:灰黄色~暗灰黄色 外:灰黄褐色~にぶい黄褐色	径3mm以下の長石・雲母をわずかに含む	良	内:ユビナデ 外:ヘラケズリ・ヘラミガキ・ヨコナデ	黒色顔料塗布 黒色磨研土器	ST1下
第5図 ST2	ST2	弥生・広口壺型壺	口:34.5 頸:23.4 底:9.6 高:54.4	内:にぶい赤褐色~明赤褐色 外:明赤褐色	径7mm以下の長石・石英・雲母を多く含む	良好	口:ユビナデ 底:ユビナデ 内:ミガキ・ユビオサエ・板ナデ 外:ヨコナデ後タテハケ・ミガキ	内側からの穿孔穴 外面に黒色顔料による 交差した模様塗布	ST2
第5図 ST3	ST3	弥生・壺	口:45.3 底:9.3 高:54.5	内:淡黄褐色 外:淡黄褐色~黄褐色	径3mm以下の長石・石英・雲母を多く含む	良	口:ヨコナデ 底:ユビナデ 内:板ナデ 外:ハケ		ST3
第9図1	SD1	土・杯	口:(7) 高:2	内・外:淡黄褐色	径3mm以下の長石・石英をわずかに含む	良	内・外:ヨコナデ他調整不明		5
第9図2	SD1	土・壺	口:(21) 高:7.7	内:灰黄褐色~にぶい黄褐色 外:褐色	径2mm以下の長石をわずかに含む	やや良	口:ヨコナデ 内:ユビナデ 外:タテハケ		1
第9図3	SD1	土・壺	口:(22) 高:4.5	内:にぶい黄褐色~にぶい黄褐色 外:にぶい褐色	径2mm以下の長石・石英・雲母を多く含む	やや良	口:ヨコナデ 内:ヘラケズリ 外:タテハケ		2
第9図4	SD1	土・ミニチュア	口:(10.4) 高:7.9	内・外:褐色	径4mm以下の長石・石英を多量に含む	やや良	外:布目・ユビナデ 他調整不明		10
第9図5	SD1	須・杯蓋	かえり:(12.2) 口:(12.6) 高:2	内:青灰色 外:青灰色	径1mm以下の長石・雲母をわずかに含む	良好	内:回転ナデ 外:回転ナデ・ヘラケズリ	取っ手の痕跡あり	22
第9図6	SD1	須・杯	口:(14.4) 底:(10.1) 高:3.6	内:灰黄色 外:褐灰色	径2mm以下の長石・雲母を含む	良好	内・外:ヨコナデ 底:回転ナデ		16
第9図7	SD1	須・杯	口:(13.2) 底:(9.4) 高:3	内:黄灰色 外:褐灰色	径3mm以下の長石・石英を含む	良好	内:回転ナデ・ユビナデ 外:回転ナデ・回転ヘラ切り	重ね焼きにより口縁以外 焼成がやや不十分	17
第9図8	SD1	須・杯	口:(10) 高:2.5	内:灰白色~灰黄色 外:灰白色~黄灰色	径2mm以下の長石を含む	良好	内:ヨコナデ・ユビナデ 外:ヨコナデ	脚部後付け	21
第9図9	SD1	須・壺	口:(38) 高:5.7	内:灰白色~黄灰色	径8mm以下の長石を含む	良好	内:ヘラナデ 外:ロ・ヨコナデ		11
第9図10	SD1	須・壺	高:10.5	内:灰白色 外:灰色	径2mm以下の長石をわずかに含む	良好	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ・線刻・棒状工具によるナデ		14
第9図11	SD2	土・甌	高:18	内:淡黄褐色~黄褐色 外:淡黄褐色	径4mm以下の長石・石英を多く含む	良	内:ヘラナデ 外:タテハケ 把手:ユビナデ・ハケナデ		1
第10図1	SC1	土・壺	口:(25) 高:2.7	内:淡黄褐色 外:褐色	径3mm以下の長石を多く含む	やや良	内:ヘラケズリ 外:ヨコナデ・タテハケ		1
第10図2	SC1	須・杯	口:(14) 脚:(8) 高:3.9	内・外:灰色	精密	良好	内・外:回転ナデ 底:調整不明	脚部後付け	4
第13図1	SK1	土・杯	口:(15) 底:(11.5) 高:3.4	内・外:褐色	径3mm以下の長石・石英を含む	良	外:ヨコナデ 他調整不明		5
第13図2	SK1	土・高杯	口:(15.2) 頸:4.4 底:10.6 高:8.5	内:淡黄色 外:褐色	径2mm以下の長石・石英をわずかに含む	良	口:ヨコナデ 脚外:ヘラケズリ 脚内:ヨコナデ・棒状工具によるナデ		6
第13図3	SK1	土・壺	高:8	内:淡黄褐色~にぶい黄褐色 外:にぶい褐色	径2mm以下の長石を含む	やや良	内:ユビナデ 外:タテハケ		4
第13図4	SK1	土・壺	口:(15.5) 高:8.5	内:淡黄褐色~にぶい黄褐色 外:淡黄褐色	径4mm以下の長石・石英を多く含む	やや不良	口:ヨコナデ 内:ユビナデ 外:タテハケ		1
第13図5	SK1	土・壺	底:(8.4) 高:12.6	内:にぶい黄褐色 外:淡黄褐色	径5mm以下の長石・石英を含む	良	内:ユビナデ 外:タテハケ 底:調整不明		3
第13図6	SK1	土・甌	口:(20.4) 底:12.2 高:19	内・外:褐色	径10~1mm以下の長石・石英を多く含む	良	内:ヘラケズリ 外:タテハケ 把手:ユビオサエ・ユビナデ		8
第13図7	SK1	土・甌	口:(23) 底:(14) 高:25.6	内:淡黄色 外:褐色	径5mm以下の長石・石英を多く含む	やや不良	内:ヘラケズリ 外:タテハケ 把手:ユビナデ・ユビオサエ	底径内外に黒斑あり	9
第13図8	SK1	土・壺	口:(17.5) 高:13	内・外:褐色	径2mm以下の長石・石英をわずかに含む	やや不良	口:ヨコナデ 他調整不明	SK1整理No.2と同一	東部表1
第13図9	SK1	須・杯	口:(10.4) 底:(4) かえり:(13) 高:3.8	内・外:灰色	径1mm以下の長石を含む	良好	口:内・外:回転ナデ 底:ヘラケズリ	底面にヘラ記号あり	12
第13図10	SK1	須・杯	口:(11.2) 底:(4.8) かえり:(13) 高:3.7	内:灰白色~黄灰色 外:黄灰色	径2mm以下の長石を含む	良好	口:内・外:回転ナデ 底:ヘラケズリ		13
第13図11	SK1	須・長頸壺	口:10.1 頸:4 高:19.3	内:にぶい赤褐色 外:暗赤褐色	径5~1mm以下の長石・石英を含む	良好	内:回転ナデ・ユビオサエ 外:回転ナデ	頸部・体部の一部に還元 反応あり	10
第13図12	SK1	須・壺	底:12.6 高:11.5	内:褐色 外:赤褐色~黄褐色	径3mm以下の長石を含む	良	内・外:回転ナデ・ユビオサエ・ユビナデ		11
第13図13	SK1	須・横瓶	口:11.8 高:35	内:灰色 外:灰白色・暗灰色	径3mm以下の長石・石英を多く含む	良好	内:タタキオサエ・回転ナデ 外:タタキ・回転ナデ 口:回転ナデ・ユビオサエ	胴部の加工穴を塞ぎ、 横に口縁を後付け	14
第17図1	SE1木枠外	土・壺	口:(27) 高:5.5	内:黄褐色 外:黄褐色	径1mm以下の石英をわずかに含む	やや良好	内:ヘラミガキ 口:ヨコナデ 外:ハケ・ヘラミガキ		1
第17図2	SE1木枠外	土・壺	口:(26) 高:5	内:淡黄褐色 外:にぶい黄褐色	径5mm以下の石英を含む	やや不良	内・外:ヘラミガキ 口:ヨコナデ		3
第17図3	SE1木枠外	土・壺	口:(25) 高:5.1	内:褐色 外:淡黄褐色	径1mm以下の石英をわずかに含む	やや良好	内:ヘラミガキ 外:口:ヨコナデ		2
第17図4	SE1木枠外	土・壺	口:(26) 高:5.3	内・外:褐色	径1mm以下の石英をわずかに含む	やや良	内:ヘラケズリ 口:ヨコナデ 外:ヘラケズリ・ハケ		6
第17図5	SE1木枠外	土・壺	口:(26) 高:5.1	内:明褐色 外:褐色	径3mm以下の石英をわずかに含む	やや良	内:ヘラケズリ 口:ヨコナデ 外:ヘラケズリ・ハケ		5
第17図6	SE1木枠外	土・壺	口:(26) 高:3.3	内:にぶい黄褐色 外:にぶい黄褐色	径1mm以下の石英をわずかに含む	良	内:ヘラケズリ 口:ヨコナデ		4
第17図7	SE1木枠外	土・壺	口:(22) 高:4.8	内・外:淡黄色	径2mm以下の石英をわずかに含む	やや不良	調整不明		10
第17図8	SE1木枠外	土・壺	高:4.2	内:褐色 外:にぶい褐色	径2mm以下の石英を含む	やや良	内:ヘラケズリ 外:口:ヨコナデ		13
第17図9	SE1木枠外	土・壺	高:4.4	内:にぶい褐色 外:にぶい黄褐色・淡赤褐色	径3mm以下の石英をわずかに含む	やや良	内:ヘラケズリ 口:ヨコナデ 外:調整不明		17
第17図10	SE1木枠外	土・杯	高:2	内・外:淡黄褐色	精密	良好	外:ヨコナデ 底:ヘラケズリ・回転ナデ		24
第17図11	SE1木枠外	土・杯	口:(13) 底:(7.8) 高:3.4	内:にぶい褐色 外:淡黄褐色	精密	やや不良	外:ケズリ 底:回転ナデ 他調整不明		20
第17図12	SE1木枠外	土・杯	口:(12) 高:2.1	内・外:にぶい褐色	精密	良好	内・外:口:ヨコナデ		22
第17図13	SE1木枠外	土・甌	高:10.8	内:にぶい褐色 外:にぶい褐色	径3mm以下の石英を含む	良	内:ヘラケズリ 把手:ハケナデ・ユビナデ		32
第17図14	SE1木枠外	須・杯蓋	口:(12) 高:0.6	内:灰色 外:灰色	径1mm以下の長石をわずかに含む	良好	内・外:口:回転ナデ	口縁後付け	44
第17図15	SE1木枠外	須・壺	口:(18.6) 高:2	内:淡黄色 外:灰白色	精密	やや不良	内:ハケナデ 口:回転ナデ 外:回転ナデ・回転ナデ		46
第17図16	SE1木枠外	須・皿	口:(16) 底:(12.4) 高:1.3	内・外:灰色	精密	良好	内:口:回転ナデ 底:ヘラケズリ		50
第17図17	SE1木枠外	須・杯	口:(12) 底:(7.2) 高:4.1	内・外:灰白色	精密	良好	内・外:口:ヨコナデ		34
第17図18	SE1木枠外	高・杯	高:2.1	内・外:灰白色	精密	良好	内:ヨコナデ・ユビナデ 外:ヨコナデ 底:回転ナデ	脚部後付け	39
第17図19	SE1木枠外	須・杯蓋	高:2.8	内・外:灰色	径1mm以下の長石を含む	良好	回転ナデ	杯身の可能性あり	43
第17図20	SE1木枠外	須・杯蓋	高:2.5	内:灰白色 外:灰色	径1mm以下の石英をわずかに含む	良好	内:回転ナデ 外:回転ナデ・ヨコナデ		45
第17図21	SE1木枠外	須・鉢?	高:7.4	内:灰白色 外:灰色	精密	良好	内:ヨコナデ・ヘラケズリ 外:ヨコナデ・ヨコハケ 口:ユビナデ		33
第17図22	SE1木枠内上層	土・壺	口:(30) 高:4.8	内:褐色 外:にぶい褐色	径3mm以下の長石を含む	良	内:ヘラケズリ 外:タテハケ 口:ヨコナデ		1
第17図23	SE1木枠内上層	土・壺	口:(34) 高:3.4	内:褐色 外:褐色	径2mm以下の長石を含む	良	外:タテハケ 口:ヨコナデ		2
第17図24	SE1木枠内下層	弥生・壺	高:3.5	内・外:淡黄褐色・暗褐色	径2mm以下の長石を含む	やや不良	口:ヨコナデ 他調整不明		1



①調査区全景（直上から、写真上方が北）



②墓群全景（南から）



①調査区北部全景（南から）



②5号土坑 完掘状況（南から）



③1号甕棺墓 出土状況（東から）



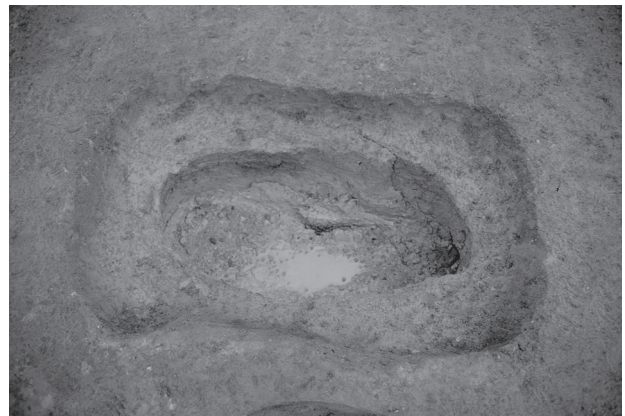
④2号甕棺墓 出土状況（南から）



⑤3号甕棺墓 完掘状況（東から）



⑥1号土壇墓 完掘状況（南から）



⑦2号土壇墓 完掘状況（南から）



① 1号竪穴住居址 土層断面（西から）



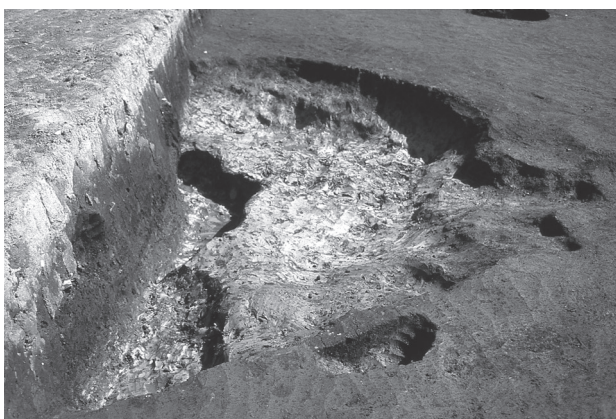
② 1号竪穴住居址 貼床検出状況（西から）



③ 1号土坑 遺物出土状況（南から）



④ 1号土坑 土層断面（東から）



⑤ 1号土坑 完掘状況（西から）



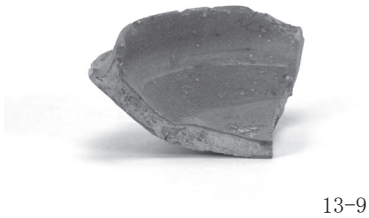
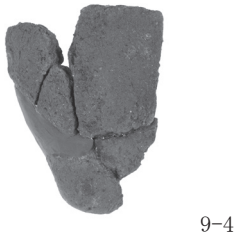
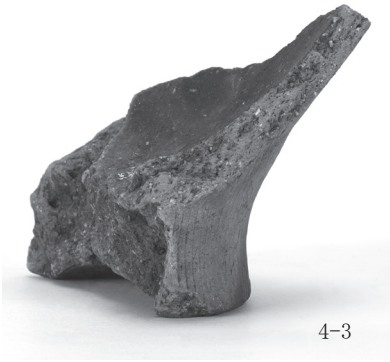
⑥ 2号土坑 土層断面（東から）

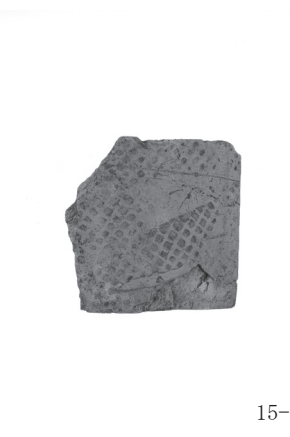


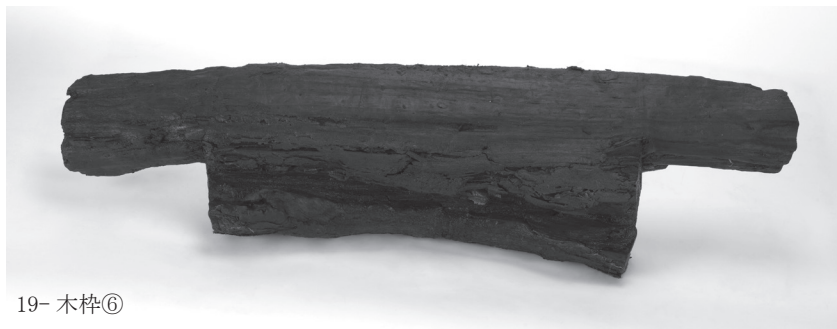
⑦ 10号土坑 完掘状況（西から）



⑧ 1号井戸 木枠出土状況（東から）







報告書抄録

ふりがな	おおいたいいせき							
書名	大板井遺跡 32							
副書名	福岡県小郡市大板井所在遺跡の調査報告							
巻次								
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 359 集							
編著者名	三津山 靖也							
編集機関	小郡市教育委員会							
所在位置	〒 838-0198 福岡県小郡市小郡 255-1 Tel. 0942-72-2111							
発行年月日	2024（令和6）年3月31日							
保管場所	〔写真・図面・遺物〕小郡市埋蔵文化財調査センター							
保管場所所在地	〒 838-0106 福岡県小郡市三沢 5147-3 Tel. 0942-75-7555							
(ふりがな) 所収遺跡名	(ふりがな) 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおいたい 大板井遺跡 32	ふくおかけん 福岡県 おこおりし 小郡市 おおいたい 大板井	40216		33° 40′ 24″	130° 56′ 31″	2022.07.25 ∩ 2022.10.26	650㎡	道路新設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
おおいたい 大板井遺跡 32	集落	縄文 弥生 古代		落とし穴状遺構 甕棺墓・土壙墓・土坑 竪穴住居址・井戸・ 土坑・溝		— 弥生土器 土師器・須恵器・木製品		
特記事項	今回の調査区はこれまでの調査区とはかなり離れた北東部の調査であるが、同時期の集落の一部と想定される遺構・遺物を確認しており、弥生中期の墓域や古代の生活の痕跡も確認できた。							

大板井遺跡 32

—福岡県小郡市大板井所在遺跡の調査報告—

小郡市文化財調査報告書第 359 集

令和 6 年 3 月 31 日

発 行 小郡市教育委員会
小郡市小郡 255 - 1

印 刷 スマートファイブ
福岡県小郡市小郡 1572 - 9

